好都合ナルヲ以テ右ノ次第ヲ横山總領事ニ傳達ノ上同總領事ヨリ内々日本政府ノ御意嚮ヲ質サルル樣依頼アリ度シ云々

就テハ右ニ關シ至急御詮議ノ上御回電請フ

在歐各大使（土ヲ除ク）、米、波蘭へ暗送セリ

三　欧州政況

1　一般問題

53　昭和10年1月21日　在伊国杉村（陽太郎）大使より広田外務大臣宛

仏伊ローマ協定成立後における中欧諸国の動向について在伊国各国大公使より聞込みについて

機密第二六號　（2月15日接受）

昭和十年一月二十一日

在伊

特命全權大使　杉村　陽太郎〔印〕

外務大臣　廣田　弘毅殿

中歐規約ニ關シ羅馬協定以后ノ成行報告ノ件

中歐規約ニ関シ羅馬協定以后ノ成行ニ関シ各方面トノ直接接觸ニ依リ得タル情報次ノ如ク報告ス

一

中歐規約ニ付独逸大使「フオン、ハツセル」ハ（一月十七日會見）独逸カ受ケタル内報ニ依レハ目下壽府ニテ條約案起草中ナルモ「ガウス」ハ「フオーミユラ」ハ既ニ安全保障委員會等ニテ從來幾度カ論セラレタル範圍ヲ出テスト云ヒ居ル由ヲ内話シ「独逸トシテハ各国側ノ態度モ不明ナレハ未タ方針ヲ決スルコト能ハス明日出發伯林ニ赴キ外務當局ト対策ヲ攻究スル段取ナリ帰伊ノ上詳細御話セシムト述ヘタリ

英国側ハ緊急ノ場合ノ協議ニ関スル條約ニハ此ノ程迄不參加ノ態度ナリシモ（墺國公使「フオルグリユーベル」一月十六日内話）「サイモン」帰英ノ上參加ニ決シタルモノノ如ク而シテ英ハ「ヒツトラー」カ「ザール」問題ニ成功ヲ收メタル此機會ニ乘シ獨ヲ聯盟ニ引入レ再軍備阻止ノ目的ヲ達セントスル魂膽ナリト當地外交界ニテハ噂スルモノ多ク英ハ此際先ツ墺ヲシテ国境ノ相互保障條約及内政不干渉協定ニ參加スヘキ旨ヲ独ニ求メシメ其參加后大国トシテノ独ニ主義上ノ均勢ヲ求メ其体面ヲ保ツヲ條件トシテ聯盟

ニ復帰セシメ軍備ノ再建ニ付テハ能フ限リノ好意的考慮ヲ與ヘントシ此点ハ一月末「フランダン」「ラヴアル」ノ倫敦訪問ニテ具体的諒解ニ達スヘク佛国側カ過日佛独出征軍人會長ノ交歓ヲ計リシカ如キハ主トシテ之カ準備工作ナリト評セラル而シテ英ハ英佛伊ノ名ヲ以テ「平和條約締結后十五年間幸ニ平和カ保持セラレタルニ顧ミ其軍事條項ハ一般軍縮協定カ成立シ各国ヲ拘束スルニ至ラハ失効スヘキモノナリ」トノ趣旨ヲ宣言シ独墺等ヲシテ他ノ各国ト平等ノ資格ニ於テ軍縮ノ事業ニ參加セシメ得ルコト、シ以テ独逸カ益々再軍備ヲ敢行セントスルヲ阻止セント計ルモ右ハ英国流ノ論法トシテハ辻褄合フヘキモ独ハ勿論佛伊サヘモ斯ル條件的平等權ヲ以テ眞ノ平等權ナリトハ認メス又平和條約締約国中ノ二三大国カ他ノ諸国ノ存立ヲ無視シテ勝手ニ其條項ノ変更ヲ宣言スルカ如キハ許ス可カラス（我トシテハ委任統治地域ニ関スル條項ニ対スル關係モアリ之ヲ看過シ得サル特別ノ理由存ス）ト論スルモノアリ「ドラモンド」ハ問題ノ「デリケート」ナルニ顧ミ各方面ニ対シ「未タ何等決定セス」ト答ヘ居ルモ羅馬協定中ノ軍事條項カ英国側ノ希望ニ出テタルハ公然ノ祕密ニシテ英カ此際軍縮問題ノ促進ニ乗出サントシツ、アルハ亦疑ヲ要セサル所ナリ

英ト伊トハ独ニ国防上最低限度ノ再軍備ヲ認メントスルモ佛ハ「ザール」問題ノ処理ニ付平和條約ノ規定ヲ尊重シタルト同様軍縮問題ノ解決ニ付テモ一應ハ條約ヲ無視スヘカラスト主張スヘク唯「ラヴアル」ハ嚴密ナル安全保障ノ途サヘ立タハ敢テ佛國側從來ノ態度ヲ固執セス而シテ右保障實現ノ爲是非トモ独ヲ中歐規約ニ引入レントシ蘇聯邦ハ此際同時ニ東方規約ニモ独ヲ加入セシメント策動シ之ニ対シ独ト墺トハ依然「アンシュルス」ヲ捨テス（此点ニ付墺国公使ハ「アンシュルス」ハ自然ノ成行ナリトテ之カ實現ニ対スル墺国民一般ノ希望ヲ明言シ独逸大使ハ「唯々時ノ問題ナリ」ト語レリ）尤モ墺ハ独ト合併后「プロシア」独特ノ强圧ヲ喰ハンコトヲ恐レ墺国公使ノ如キ『「プロシア」人ハ外ニ向テハ頻リニ平等權ヲ云々スルモ本來命令スルカ又ハ服從スルカ二者ノ内一ヲ取ルコトノミヲ知リ平等ノ資格ニ立ツテ相手方ト協力スルコトヲ知ラサル民族ナレハ「アンシュルス」ニシテ一度實現セハ墺国内ノ「ナチ」ハ忽チ姿ヲ隱シ墺国人ハ「プロシア」人ノ「ドミナシヨン」ノ下ニ屈スルニ至ルヘク此点實ハ墺国側ノ恐ル、所ナリ」

ト内話シ「チエツコ」公使「ランチセック、チュバコブスキー」ハ（一月十七日）『独ハ今后多分関税同盟ノ形ニテ「アンシュルス」ノ目的ヲ達成セントスルナルヘク嘗テ伯林ニ公使タリシ際「ストレゼマン」ハ「ベネシュ」ト自分ト三人ノ話合ノ席上独、墺、致ノ「ツオルフエライン」ヲ提議シ「ベネシュ」ハ致カ継子トナルコト必然ナリトテ反対シタルコトアリ又「クルシュース」モ独墺ノ関税同盟ヲ企テ「ブリアン」ノ激怒ヲ買ヒタルコトアリシカ独逸ノ遣口ハ何時モ其慣用手段ヲ繰返ニアレハ「ヒツトラー」「ノイラート」ノ輩モ中歐規約ニ加入後ト雖此方法ニ依リ「アンシュルス」ヲ實現シ得ヘシト做スニ相違ナク此点致トシテハ懸念ニ堪エサル所ナリ』ト内話セリ

「ザール」ノ成功ニテ独逸大使ノ如キハ「始メテ世ノ中カ明ルクナレリ」ト述ヘ其鼻息仲々荒キモ此機會ヲ逸スレハ大国トシテノ立場ヲ維持シツ、列强ノ協調ニ加入スル機會ヲ永遠ニ取逃ス虞モアレハ平等權問題ニ付テモ折角「フオーミユラ」ヲ攻究中ノ模様ニテ必スシモ再軍備カ確認セラレタル后ニ非レハ聯盟ニ復帰セサルヘシト云フカ如キ强硬ナル態度ヲ執ルモノニハアラサル様子ニテ之ニ対シ佛国側及小協商国側ハ羅馬協定カ其効果ノ一半則チ「ザール」問題カ独逸ニ有利ニ解決セラレタル場合ニ対スル保障ノ役目ハ果シタルモ他ノ一半ハ之ヲ今后ノ努力ニ俟タサル可カラスト爲シ交讓妥協ノ精神ヲ以テ独逸側トノ會商ニ善処セントスルノ気運モ稍動キツ、アルカニ見受ケラル然レトモ小協商国側ハ「ムツソリーニ」ノ腹カ飽迄英佛独伊四大国規約ノ精神ヲ以テ中歐ノ平和ヲ維持セントスルニ存シ現ニ伊太利側ハ「羅馬ノ會談ニ際シ英国側カ絶エス背后ニ在ツテ事實上之ニ參加シタルト同一ノ役割ヲ演シ又独逸側カ協議ノ内容全部ヲ其都度通報セラレタル等ノ事實ニ照スモ羅馬協定ハ四大国規約ノ精神ニ依リ成立セルモノナリ」ト言ヒ觸ラシ又條約改訂論ニ付テハ「聯盟規約第十九條カ嚴然トシテ存続スル限リ墺地利ノ国境固定ヲ目的トスル羅馬協定成立后ト雖他日必要起ラハ其変更ヲ論議シ得ヘク改訂論ハ国際平和保持ノ安全辨ナリ」ト稱スルヲ聞キ多大ノ疑惑ヲ抱キ「協定カ想定スル諸條約ノ内容及之ニ対スル独波ノ態度カ判明セサル間ハ容易ニ安心スルコト能ハス」ト説キ羅馬尼公使「ルボシヤン」（一月十七日會見）ハ『「ベネシュ」ハ嘗テ「バルトー」ノ訪伊后直ニ來伊ノ筈ナリシモ今

同ハ「テイテュレスコ」ト共ニ愼重ナル態度ヲ執リツヽアリ」ト内話セリ

更ニ法王廳ハ中歐規約ノ成立ヲ希望シ當初墺カ大国ノミノ保障ヲ要望シ小協商国ノ参加ニ反対シタルトキ「フオンパーペン」カ一時「シユスニツヒ」宰相ヲ動カシテ不同意ヲ唱ヘシメントシタルニ対シ『墺ノ生命ハ平和ニ在リ平和サヘ続カハ「ウキーン」ハ中歐ノ心臓トナリ得ヘキモ現狀ニテハ未來ハ全然暗黑ナルヘシト説キ終ニ羅馬協定ヲ應諾セシメタル旨内聞セリ

二

壽府ニテ「リトヴイノフ」カ「ラヴアル」ニ対シ羅馬協定カ累ヲ東方規約ノ成立ニ及ホスヘキ旨ヲ述ヘ「ラ」之ヲ慰撫シタリトノ報道アリ而シテ歐洲ニ於ケル我カ対蘇政策ノ要点ハ蘇ト西歐トヲ成ルヘク近接セシメス蘇ヲシテ我ニ對シ西歐ヲ利用セシメサルコトニ在リト確信スルヲ以テ㈠東方規約カ日蘇ノ開戰ニ際シテモ適用アルヘキコト及㈡嘗テ蘇側カ不侵略條約ヲ締結シタル際各国側ハ何レモ蘇ノ赤化宣傳ニ対シ嚴密ナル留保ヲ附シタルニ拘ハラス最近ハ殆ント之ヲ忘レタルモノノ如ク而シテ蘇トノ戰爭ハ多クノ場合蘇ノ赤化運動ニ関聯シテ起ルヘキハ多言ノ要ナケレハ東方規約ヲ結フニ當リテモ此点ニ注意スヘキコト等ニ付独波両大使芬、羅等ノ公使ニ全然私見トシテ耳打シタルニ彼等ハ右ノ点ニハ從來気付カサリシモノノ如ク又㈢日本側ハ敢テ蘇ト西歐トノ平和的協力ヲ嫉視スルモノニハアラサルモ餘リニ蘇ヲ附ケ上ラシムルハ實ハ蘇ノ爲ニモ亦歐洲ノ爲ニモ害アツテ益ナキ結果ヲ惹キ起スヘキヲ以テ中歐規約サヘ成立セハ夫レニテ歐洲ノ安定ハ一應實現シ得ル次第ニモアリ東方規約ノ問題ハ其后ニ及ンテ徐ロニ考慮スル方然ルヘキ旨ヲ説ケルニ何レモ同感ノ意ヲ表セリ

尙羅馬尼公使ハ「羅ハ波、致トノ間ニ同盟條約ヲ結フヲ以テ波、致カ第三国ト干戈ヲ交ユル場合直ニ赴援ノ義務アルモ東方規約ニシテ成立センカ波、致カ侵略国ナリト看做サルヽ場合ニハ却テ之ヲ攻撃セサル可カラサル立場トナリ例ヘハ蘇側ノ赤化運動ニ挑發セラレテ波蘭カ已ムヲ得ス干戈ニ訴フルカ如キ場合却テ蘇ニ味方スルノ奇ナル現象ヲ生スレハ此点ニ付深ク考慮スルノ要アリ」ト内話セリ

54　昭和10年2月5日　在伊国杉村大使より広田外務大臣宛

再軍備問題および対連盟問題等独国外交上の諸問題につき在伊国独国大使より聞込みについて

機密第五二號　（3月4日接受）

昭和十年二月五日

在伊

特命全權大使　杉村　陽太郎㊞

外務大臣　廣田　弘毅殿

駐伊独逸大使「フオン、ハツセル」トノ會見錄送付ノ件

二月四日駐伊独逸大使「フオン、ハツセル」トノ會見錄別紙ノ通送付スルニ付御査閲相成度シ尙ホ本公信ノ内容省外ニ漏レサル樣特ニ御配慮相仰度シ

（別　紙）

二月四日駐伊独逸大使「フオン、ハツセル」ヲ訪ヒ一時間半ニ亘リ諸問題ニ付會談シタルカ其ノ要領次ノ如シ

一

独逸ノ再軍備ハ若シ昨年六月「ヒツトラー」及「ムツソリーニ」カ「ヴエニス」ニテ會見シタル頃ナレハ相當ノ程度ニ喰止メ得タルモ今日トナリテハ時機已ニ遲ク過般「ラヴアル」羅馬ニ來レル際「ヴエニス」宮ノ夜會ニテ「ムツソリーニ」ト三人ニテ會談ノ際「ハ」ニ於テ淡白ニ之ヲ陳ヘタルニ「ラヴアル」ハ「然ラハ時機ヲ失シタル責任ハ何レニアリヤ」ト問ヘルニ對シ「ムツソリーニ」ハ口ヲ挾ミ「夫ハ佛蘭西側ニ在リ」ト明言セリ

二

倫敦ニ於ケル英佛ノ會談ニ於テ空軍ノ相互援助條約締結ニ付話合アリタル由「シヤンブラン」大使ヨリ本日聞込タルカ欧洲各國カ未タ十分ニ融和セサルニ當リ濫リニ相互援助條約ノ締結ヲ目論見ハ決シテ一般的安全ヲ增進スル所以ニアラス英佛ハ之ニ依リ独ニ対シ各々自國ノ安全ヲ增シ得ヘシト思惟スルナラン、独トシテハ英佛伊及佛ノ與國ノ腹ヲ見拔キ居レハ簡單ニ之ニ引込マル、コトナシ尙陸海軍ノ共同作戰ノ困難ナルハ過去ノ經驗ニ依リ何人モ之ヲ熟知セルカ空軍ニ至ツテハ一層困難ナルヘク空戰法規モ未タ制定セラレサル今日侵略國ト看做サレ八方ヨリ攻撃セラルヽ場合

ハ勿論他ト協力シテ侵略國ヲ攻撃スル場合ト雖空軍ノ聯合ヲ目論ムカ如キハ事實危險千萬ナル結果ヲ齎サン

三

英佛側ハ何トカシテ独ヲ聯盟ニ引戻シ其手足ヲ縛セント計ルモ與國ヲ有セサル独ハ例ヘハ規約第十五條ノ適用ニ當リ日支事件ニ於ケル日本側ト同一ノ立場ニ陥レラル、コト無キヲ保セス嘗テ「ユーゴースラビヤ」ニ公使タリシ頃屢々聯盟復帰ノ勸誘ヲ受ケタルモ「ユ」ニシテ若シ第十五條適用ノ際佛ト全然独立ニ投票ヲ爲シ得トノ保障カ事實上明トナル点ハ乍遺憾安心シテ聯盟ニ帰リ得スト答フルヲ常トセリ

尚ホ今回英佛側ハ米國カ近ク聯盟ニ加入スヘキヲ仄カシ時機ヲ失セサル様復歸ヲ決心スヘキ旨切言シタルモ米國側ノ輿論カ常設國際司法裁判所參加問題ニ付テサヘ未タ十分熟セサルヲ見ルトキ米國カ聯盟ニ加入スル可能性ハ當分無キモノト云フヘク從テ独トシテハ輕率ニ聯盟復帰ヲ實行シ得サル次第ナリ（「日本側ニ於テ萬一聯盟ニ復帰スルカ如キコト無キヤ」ノ点ヲ眞面目ニ質シタレハ「斷シテ無シ」ト確答シ且「聯盟トノ平和的協力ニ付テモ裁判官又ハ委員ノ選擧ニ日本側カ參加シ得サル事情モアレハ聯盟側ニ於テ我ニ対シ特ニ好意的措置ヲ講スルニアラサレハ両者ノ協力ハ殆ント断絶スルニ至ルヘシ」ト附加シタルニ大ニ安心シタル模様ナリキ）

四

海軍々縮會議ノ成行ニ付伯林ニ於テモ種々心配シ居レルカ独逸ヲ會議ニ招請スルカ如キコトナカルヘキヤ（右ニ対シ外相ヨリ在本邦佛國大使ニ述ヘラレタル所ヲ内話シ「我方トシテハ會議ノ成功ヲ期スル爲參加國ノ数ヲ増ササルヲ適當ト考フル次第ニテ独ニ対シ反感ヲ有スルカ爲其參加ヲ拒否スル次第ニアラス」ト告ケタルニ大ニ滿足セル模様ニテ）又再軍備問題其他軍縮ニ関スル一切ノ問題ニ付独逸側トシテハ自ラ進ンテ各國ト話合ヲ爲サントスルカ如キコト決シテナシ

五

東方規約參加問題ニ付テハ独逸側トシテハ其及ホス影響ノ重大ナルニ顧ミ之ヲ考慮スルコトスラ避ケ居ル次第ニテ今般伯林外務省ニ於ケル首脳部協議ノ結果ヲ齎ラシ此旨「ムツソリーニ」ニ通告シタルニ「ムツソリーニ」ハ右ニ対シ毫モ不滿ノ色ヲ示サヽリキ蓋シ彼ハ英佛独伊四大國ノ協調ノミ克ク欧洲ノ安定ヲ計リ得ルモノト信スルモノノ如シ相互援助條約ハ不侵略條約ト異リ例ヘハ波蘇カ開戰スル場合独モ佛モ伊モ戰爭ニ引込マルヽコトヽナリ小國又ハ弱國ハ強國ノ軍隊通過等ノ爲意外ノ犠牲ヲ拂ハサルヘカラス此點「バルチック」諸小國ノ如キハ夙ニ気付キ戰慄シ居レリ

六

中欧不干渉規約ニ付テハ現下ノ鎖國的經濟政策ヲ改メテ各國間ノ通商ニ多少ナリトモ自由ノ気分ヲ漂ハサントセハ先ツ政情ノ安定ヲ計ルコト必要ナリトノ見地ヨリ独逸側ニ於テモ同情ヲ以テ問題ヲ考慮スル方針ナルモ一概ニ不干渉ト稱スルモ例ヘハ「ハプスブルグ」王朝ノ復辟問題ノ如キ純然タル内政問題ニ付テサヘ小協商國側ヨリ手嚴シキ抗議ヲ墺國ニ持出ス情勢ニテハ不干渉トハ果シテ何ヲ意味スルヤ明瞭ナラス小数（少カ）民族ノ問題ハ云フ迄モナシ独墺ハ民族ヲ同シウスル関係上 Le droit naturel トシテ幾多密接ナル関係ヲ有スルヲ以テ双方カ全然自由ノ意志ヲ以テ爲ス所ニ対シ一々外部ヨリ干渉セラル、カ如キコトアランカ之ニ到底忍フ可カラサル所ナルヲ以テ夫等ノ点ニ付一應説明ヲ求ムルコト、シタルノミナラス不干渉條約ニ參加スル國カ若シ墺國ノ接壤國ナリトセハ瑞西ヲ除外スヘカラス又佛又ハ羅馬尼ノ如キカ參加スルトセハ英國モ當然加入セサルヘカラス更ニ之ヲ國際聯盟ノ下ニ置カント稱スルモ單ナル精神的意味ナラハ兎モ角聯盟トノ間ニ何等カ具体的関係ヲツクルニ於テハ其点ヲ明確ナラシメ置カサルヘカラス旁ラ此等ノ點ニ一應質問ヲ發シタル次第ナリ

七

墺國ノ独立及領土保全ノ爲佛伊カ必要ナル場合執ルヘキ緊急ノ措置ニ付協議スヘシトノ了解ニ付テハ不干渉規約成立后モ尚且此了解カ存続スヘキモノナリヤ否ヤヲ確メタルニ右ハ直ニ消滅スルモノナリトノ確答ヲ得タリ

八

欧洲ノ政情カ今日ノ如キ有様ニテハ相互援助條約程危險ナルモノハ無ク而シテ右ハ独逸ヨリモ波蘭ニ於テ然リト云ハサルヘカラス故ニ當分ハ如何ナル種類ノ安全保障協定ニ対シテモ周密ナル注意ヲ以テ加入ノ可否ヲ考慮セサル可カラスト認ム

九

「エテイオピヤ」ニ対スル伊太利側ノ策動ニ付佛國側ニ於

テハ羅馬協定中植民地ニ於ケル經濟上ノ利害ニ関スル部分ニ於テ或種ノ協力ヲ適當ナリトスル旨ヲ認メ佛國側ニ於テ暗ニ「エティオピヤ」ニ対スル伊太利ノ自由行動ヲ容認セルヤノ疑アリ右ハ「ラヴァル」ノ羅馬訪問前「アロイジ」ノ如キカ佛國側ノ讓歩ヲ以テ不十分ナリトシ協定ニ反対シタルニ拘ハラス終ニ提携ヲ約スルニ至リタル裏面ノ事情トシテ當時既ニ感知シタル所ナルカ今后此点ニ関スル佛伊ノ了解カ如何ニ現實化セラル、カハ大ニ注視ヲ要スル點ナリト認ム独逸側トシテハ阿弗利加ニ対シ經濟上相當大ナル利害ヲ有スル次第ニモアリ今后モ監視ヲ怠ラサル方針ナリ

十

日本側カ内蒙及外蒙ニ策動シ此方面ニ於テ結局蘇聯邦ト衡（衝カ）突セントスル形勢アリト傳ヘラル、カ嘗テ支那ニ在勤中彼ノ地方ヲ視察シタル經驗モアリ事件ノ進展ヲ注意シ居ル次第ナリ（今回ノ事件ノ眞相ニ付詳細説明シタルニ唯微笑シテ聞流セリ）

十一

英國側ハ現實ノ利益ヲ目標ニ話ヲ進メントシ佛國側ハ何事モ形式論ニ囚ハル、傾アリ両者ノ間ニ行キ方ヲ異ニスルハ今回ノ倫敦會談ニ於テモ從來ト其軌ヲ一ニス両國ノ外交上ニ於ケル慣用手段カ斯ク喰違フ間ハ眞ノ協調ハ覺束ナシ佛國側ハ總テノ問題ヲ一般化セントスルモ其結果ハ小協商國等ヲシテ徒ニ虎ノ威ヲ借ル狐タラシメ却テ佛國側カ彼等ニ引摺ラレ累ヲ自國ノ立場ニサヘ及ホスニ至ルニ拘ハラス佛國爲政家等カ未タ容易ニ其迷夢ヨリ醒メサルハ歎カハシ

以上独逸大使ノ内話セル所ニ徴スルモ欧洲政情ノ安定ニハ前途尚ホ幾多ノ障害横ハルモノト見サルヘカラス而シテ独波両國ノ結合ハ両國ニ対シ外間ニテ殆ント想像シ得サル程大ナル自信ヲ與ヘ両國ハ此上與國ヲ求メントセス我ニ対シテハ蘇聯邦ニ対スル関係上相當好意ヲ表スルモ欧洲問題ニ対シ無関心ノ態度ヲ執ル我方ノ方針ニ顧ミ進ンテ我ト提携セントスルカ如キ模様ナク我トシテモ亦此際彼等ト結フノ利ナルヲ認メサル次第ニモアリ時々會見シテ情報ノ交換ヲ行フ程度ニ彼我ノ関係ヲ止ムルヲ適當ナリト思考ス

55　昭和10年2月8日　在伊国杉村大使より広田外務大臣宛

仏伊ローマ協定が欧州情勢に及ぼすであろう各種影響および我が国と連盟の協力問題等につき駐伊国英国大使と意見交換について

（3月4日接受）

機密第五五號

昭和十年二月八日

在伊　特命全權大使　杉村　陽太郎〔印〕

外務大臣　廣田　弘毅殿

「ドラモンド」トノ會見録送附ノ件

二月七日「ドラモンド」トノ會見録別紙ノ通送付スルニ付御査閲相成度シ尚本公信ノ内容省外ニ漏レサル様特ニ御配慮相仰度シ

（別　紙）

二月七日「ドラモンド」ト會見シ倫敦ニ於ケル英佛會談、日本ト聯盟トノ協力等ニ付意見ヲ交換ス要領次ノ如シ

一

本使曰ク　今回ノ倫敦會談ハ欧洲ニ於ケル平和確立ヲ目的トシタルモノナレハ其協定モ亦欧洲以外ニ効果ヲ及ホササルモノト見テ可ナリヤ

「ド」曰ク　然リ

本使曰ク　「コンミユニケ」ヲ見ルニ「ヴエルサイユ」條約ノ軍事條項ニ代ルヘキ軍備ニ関スル協定ニ付英文ニテハ Armaments generally 佛文ニテハ Les Armements en général トアリ然ルニ「フランダン」首相ハ帰国后「軍備ニ関スル convention générale ノ締結」云々ト述ヘ恰モ壽府ニ於ケル軍縮會議カ作成スヘキ一般軍縮條約ノ成立ヲ以テ前記軍事條項廢棄ノ條件ト爲スモノノ如ク而シテ右ハ「ヴエルサイユ」條約ニモ En vue de rendre possible la préparation d'une limitation générale des armements de toutes les nations ナル文句軍事條項ノ前文ニ掲ケラル、ニ顧ミテモ尠クトモ佛國側ニ於テハ一般軍縮條約ノ成立ヲ條件ト爲スモノナルヤニ思惟セラル、カ如何

「ド」曰ク　佛國側トシテハ或ハ斯ク考ヘ居ルヤニ計ラレサレト倫敦ノ會談ハ Limitation des armements ト云ハンヨリハ寧ロ Fixation des armements 即チ軍縮ニアラス不法ニ行ハレタル軍擴ヲ或ル程度ニ固定セントスル趣旨ナレハ直接独逸ニ関係アル諸國ノ軍備ノミヲ目標ト爲シタルモノト見ルヘク而シテ「コンミユニケ」ニ generally トカ

en général トカ云ヘルハ陸海空軍ノ全部ヲ包含スル趣旨ト解シテ可ナラン

本使曰ク　本件ハ「ヴエルサイユ」條約及軍縮會議ノ関係上日本人如キニ対シ萬一佛蘭西側ノ解釈ナリト想像セラルルカ如キ意味ナラハ重大ナル影響ヲ及ホスモノト考ヘラレサルニアラス例ヘハ日本ノ反對ニ依リ一般軍縮條約カ成立セサルカ如キ場合カ萬々一アリタリトセンカ「ヴエルサイユ」條約ノ軍事條項ヲ廢棄シ得サル責任ヲ我ニ轉嫁セラル、虞モアリ右ハ單ニ自分一個ノ思付ナレトモ尠クトモ英国側ニ於テハ此点ヲ明確ニセラレ「コンミユニケ」ノ文句通リニ實行セラレンコトヲ希望ス

「ド」曰ク　其通リナリ（直ニ「ノート」シ居リタレハ多分倫敦ニ照會スルコト、察セラル）

本使曰ク　「ヴエルサイユ」條約ノ改訂ハ各締約国ニトリ重大ナル関係ヲ有スル次第ニモアリ今回ノ如ク英佛本位乃至歐洲本位ニテ之ヲ行ハントスルハ假令單ナル形式手續上ノ事項ニ過キストスルモ不当ト云ハサルヘカラス日本ハ聯盟ヨリ脱退シタルモ平和會議ニ於テ占メタル五大国ノ一タル地位ハ條約上ニモ嚴然トシテ存續スルヲ以テ此点ニ付將來豫側(測カ)セサル面倒ノ起キサルコトヲ希望ス

「ド」曰ク　其通ナリ

（本問題ハ委任統治地域其他ニ関シ我々直接重大ナル関係ヲ有スル平和條約ノ條項ヲ歐洲列强サヘ同意セハ其「リーダーシツプ」ニ依リ変更ヲ発意シ得ルカノ如キ感觸ヲ一般ニ与フル丈ケニテモ不利益ナリト思考スルヲ以テ特ニ之ヲ指摘スルノ要アリト認メタリ）

本使曰ク　英国ハ結局東方規約ニ參加スル意向ナルカ將又參加セサル迄モ何等カ具体的方法ヲ以テ間接ニ之ヲ支持スル底意ナルカ

「ド」曰ク　断シテ其考ナシ英国側トシテハ今回ノ協定ニ依リ「ロカルノ」條約ニ基ク義務以上ノ何等ノ義務ヲモ負ハス

本使曰ク　二月五日ノ「タイムス」カ指摘シタルカ如ク東方規約ハ露西亞ヲ主タル締約国トシ而シテ露ハ歐洲的国家ナルト共ニ亞細亞ニ對シ多大ノ利害ヲ有スルモノナレハ露ト其歐洲ニ於ケル隣接諸国トノ間ニ結ハレタル相互援助條約ニ依リ露ト亞細亞諸国トノ間ノ関係カ影響セラレ又之ニ反對ノ場合モ起リ得ト信スルヲ以テ此点篤ト考量ヲ要ス

「ド」曰ク　東方規約ハ「バルトウー」「リトヴイノフ」原案ニ依リ佛蘇独波「バルチツク」諸国、小協商国ヲ網羅セントスルモノナルカ土耳古及勃牙利ハ其埒外ニ在リ從テ歐洲ノ方面ニ於テモ完全ナルモノトハ云ヒ難シ

（東方規約ノ成否ハ日蘇関係ニ取リ重大ナル関係ヲ有スルモノト認ムルヲ以テ我方トシテハ極力之カ成立ヲ妨害スルノ策ニ出テサル可カラス幸ニ「ド」トノ聞込ニ據ルモ独逸ハ断然不參加ニ決シ居ル由ナレハ目下ノ処佛国側カ如何ニ骨折ルモ其成立ハムツカシト見ルヲ當レリトスヘシ）

本使曰ク　英国ノ新聞ハ勉メテ独逸ヲ懷柔セントスルカ如キ口調ニテ倫敦協定ヲ論スルモ佛国ニ於テハ「タン」ヲ始メ恰モ対独同盟カ成立セルカニ吹聽シ独逸側ハ之ニ對シ露骨ニ反感ヲサヘ表セントスル有様ナリ事情斯クノ如クニハ羅馬協定モ何時其目的ヲ達成シ得ルヤ殆ント見据エ付カスト云フモ可ナラスヤ

「ド」曰ク　独逸カ果シテ英佛ノ勧誘ニ乗ルカ否カハ未定ナルモ仮ニ之ニ應シタリトスルモ必スヤ夥多ノ難題ヲ持掛ケ結局喧嘩別レトナルコト殆ント疑フ可カラス平和ノ前途ハ未タ甚タ遼遠ナリ

二

「ド」曰ク　日本ト聯盟トノ平和的協力ノ問題ニ付壽府ニテハ Trop rigide ナル態度ヲ執リ居ル模様ナルカ本來聯盟脱退ト脱退后ニ於ケル平和的協力トハ別個ノ問題トシテ考ヘ得ル次第ニテ日本ノ如キ大国ヲ疎外シテ眞ノ国際協力ヲ期待シ得サルハ言ヲ俟タス故ニ何トカ円滿ニ話合ヲ付クルコト聯盟ニ取リテモ利益ナリト思惟シ居レリ

本使曰ク　日本側ニ於ケル壽府側ノ態度次第ニテハ相當言分アル模様ナレハ結局全部関係ノ断絶ニ向ツテ進ムコト、ナルヤニ豫察ス嘗テ壽府ヲ去ルニ臨ミ「將來何カ大事件カ起キ国際関係ノ建直シカ行ハル、カ如キ機會トモナラハ日本ト聯盟トノ関係ヲ回復スルコト可能ナルヘキモ夫迄ハ大勢上両者ノ接近ヲ考フルモ實ハ益少カラン」トノ御話アリタルカ自分ハ今日ニ於テモ右ニ對シテハ同感ナリ

「ド」曰ク　御互ハ目下問題ノ解決ニ對シ發言権ナキ立場ニ在ル次第ニモアリ何等カ機會ノ來ル迄観望スヘシ

三

「ド」曰ク　貴大使カ常設国際司法裁判所ノ裁判官ニ推擧セラレタリトノ新聞電報ヲ見タルカ恐ラク人違ヒナラント

思ヘリ裁判官タルコトカ貴大使ノ柄ニ無キハ自分ヲ始メ壽府ニ於テ凡ソ貴大使ヲ識レルモノノ何レモ感ヲ同シウスルトコロナラン

56　昭和10年3月1日　在ルーマニア藤田(栄介)公使より広田外務大臣宛

ベッサラビア問題に対しソ連側が譲歩との報道につきルーマニア外相に確認の上欧州政局および満州国問題に関し同外相と意見交換について

羅機密第三二號　（接受日不明）

昭和十年三月一日

在羅馬尼

特命全權公使　藤田　榮介

外務大臣　廣田　弘毅殿

本使**ティテュレスコ**外相會談要領報告ノ件

二月廿六日本使他用ニテ**ティテュレスコ**外相往訪ノ節同外相トノ間ニ爲セル會談要領左ノ如シ

(一)**ベッサラビヤ**問題ニ關シテハ二月十五日ノ當地新聞**ウニヴェルスル**紙ニ「嘗テ**リトヴィノフ**ガ**ティテュレスコ**ニ對シ**ベッサラビヤ**問題ニ關シ保障ヲ與ヘタル結果羅國トシテハ同問題ハ最早ヤ兩國間ニ生起セサルモノト看取シ得ルニ至レリ」（往信普通第二六號參照）トノ記事掲載セラレ居リタルニ付本使ハ**ティテュレスコ**外相ニ對シ右記事ハ果シテ事實ナリヤト訊ネタルニ同外相ハ之ヲ肯定シタル上實ハ**リトヴィノフ**ガ余ニ右保障ヲ與ヘタルハ羅國ノ露國承認以前ノ事ニ屬スト答ヘタルニ付本使ハ更ニ然ラハ右保障ヲ以テ露國カ**ベッサラビヤ**ニ對スル主權ヲ放棄シタルモノト了解シ差支ナキヤト突込ミタルニ外相ハ明答ヲ避ケ**リトヴィノフ**カ余ニ保障ヲ與ヘタルノミナラス露國トハ既ニ不可侵條約ヲ締結シ居ル關係モアリ羅國トシテハ露國ヨリ**ベッサラビヤ**ヲ侵サルル憂ナキコトトナリタル次第ニテ問題ハ事實上解決セルモノナリト回答セリ

(尚二月二十七日本件ニ關シ在當地**ポーランド**公使ハ本使ニ對シ露國カ事實上**ベッサラビヤ**ヲ放棄シタルコトハ事實ナルモ右ハ當然同地方ニ對スル主權ヲ放棄スルコトヲ意味セサルモノト思考セラルルニ付**ティテュレスコ**トシテハ或ハ之レカ爲露國ト交渉ヲ開始スルニ至ルヘク又最近ノ露羅接近ノ事實ニモ鑑ミ他ニモ何等カノ目的ヲ以テ近ク**ティテュレスコ**ノ**モスコー**行カ實現スルヤモ計ラレス其ノ際露國カ果シテ名義上トハ云ヘ**ベッサラビヤ**ニ對スル主權ヲ放棄スルコトニ同意スルヤ否ヤ逆睹シ難キモ露國ノ眞意ハ**ポーランド**、**ルーマニア**間對露防禦同盟ヲ破壞スルニ在ルモノノ如ク觀測セラルルヲ以テ或ハ右問題ニ付テハ**ルーマニア**ニ讓歩スルコトアルヤモ知レスト語レリ)

(二)次イテ本使ハ最近露國カ佛國小協商國ニ接近シツツアル通リ種々平和工作ニ努力シ居ルハ如何ナル動機ニ出テタルモノナリヤ最近露國カ單一國家共產主義卽チ共產主義ハ他國トハ關係無ク一國內ニ於テモ成立スルモノナリトスル主義ニ轉向シタル結果必スシモ他國ニ對スル共產主義宣傳ヲ必要トセス場合ニ依リテハ之ト提携スルノ得策ナルコトヲ認メ茲ニ平和工作ニ努力スルコトトナレルモノナリヤ將又恐日恐獨等ノ如キ專ラ外政上ノ理由ニ依ルモノナリヤ此ノ點ニ對スル貴見如何ト訊ネタルニ外相ハ露國ノ平和工作ハ主トシテ外政上ニ基クモノニシテ換言スレハ專ラ恐獨ニ胚胎スルモノナリ而シテ同シク獨逸ヲ敵トスル佛國ト結フニ至レルハ當然ノ事ニ屬シ延テ佛國ト相通スル小協商諸國ニ接近スルニ至レル次第ナリト答ヘタリ依テ本使ハ更ニ前記**ベッサラビヤ**問題及二月二十一日羅國外務次官ノ議會ニ於ケル聲明（右聲明ニ依レハ露國ハ大戰中帝政露國ニ寄託セル羅國官廳書類ノ返還及羅國ニ在ル**オルトドックス**教會ノ羅國側ニ於ケル自由使用ヲ認メタリ）等ニ於テ露國カ讓歩シツツアルコトヲ認メ得ル處目下露羅關係ハ如何ナル程度ノモノナリヤト訊ネタルニ外相ハ露國カ恐獨ノ結果羅國ニテ接近シ來リタル事ハ事實ニシテ羅國トシテハ既ニ**ポーランド**トハ防禦同盟アリ又出來得レハ露國トモ相提携スルニ至ルコト望マシキ次第ナリト答ヘタルヲ以テ然ラハ目下露國トノ間ニ右ノ意義ニテ何等カ交渉中ノコトニテモアリヤト突込ミタルニ外相ハ前述ノ如キ露羅接近ノ事實ハアルモ夫レ以上深キモノアルニ非ストテ多少意外ナリトノ面持ヲ示セリ

(三)本使ハ更ニ轉シテ目下ノ歐洲懸案事項卽チ東歐協定（ママ）、羅馬協定、防空協定等ニ言及シ右諸協定ニ對シ獨逸カ反對スルカ如キ場合羅國ハ如何ナル態度ヲ取ルヘキヤ又右ノ場合ニ於ケル歐洲政局ニ對スル貴見如何ト訊ネタルニ外相ハ羅國ノ親佛主義ハ今日ト雖モ何等變化スル所ナシト雖モ獨逸ニ對シテ正面ヨリ反對ノ態度ヲ取ル積リナ

キ次第ヲ以テ若シ獨逸カ東歐協定ニ參加セサル場合ニ於テハ羅國トシテハ同シク參加スルコトヲ得ス結局中立ノ態度ニ出テサルヲ得ス然レトモ羅馬協定及防空協定ニ付テハ東歐協定ノ場合トハ自ラ態度ヲ異ニセサルヲ得スト答ヘ更ニ語ヲ繼イテ一般歐洲政局ニ論及シ獨逸ノ外交政策ハ賢明ナル遣方ト言ヒ難シ右政策ハ徒ニ諸外國ヲ**プロヴォーク**スルノミニテ實效ヲ擧クルコトヲ得ス結局獨逸ヲ恐レ居ル露國ヲシテ佛國ノ許ニ駛ラシメタルモノニシテ佛國トシテハ對獨關係上好機至レリト爲シタルモノナリ尤モ日本ニトリテハ露獨兩國カ對抗シツツアルコトカ有利ナルヘシ若シ露佛ノ代リニ露獨ノ接近トナリ露國カ後顧ノ憂ヒ無ク極東ニ進出シ得ルニ於テハ日本ニトリテモ痛手ナルヘシト語レリ

(尙本件ニ關シ前記**ポーランド**公使ハ本使ニ對シ東歐協定ハ現在規定ノ儘ニテハ獨逸等ノ反對ニ依リ不成立トナルヘキヲ以テ或ハ獨逸ノ主張スルカ如キ修正ヲ加ヘタル上成立スルヤモ知レス右場合飽迄モ現在ノ儘ノ東歐協定ヲ主張スル露國ニ對シ佛國カ如何ナル態度ニ出ツヘキヤ頗ル興味アル問題ニシテ露國トシテハ自說ヲ貫徹シ得サル場合ニハ寧ロ獨逸ニ接近スルヲ以テ得策トセサルモトモ想像セラルル所露獨接近ハ日本ニトリテハ好都合ニハ非サルヘシト語リタルコトアリ)

(四)最后ニ本使ハ單ナル私見トシテ滿洲國ノ內政モ順次整頓シ來リ北鐵問題解決ノ結果露國トノ關係モ好轉シ且英佛等ノ實業界ニ於テモ**バンビー**卿一行ノ報告佛實業家ノ滿洲投資等ニ依リ滿洲國ニ對シ好感ヲ示シ來リタル次第ニモアリ今直ニトハ云ハサルモ近キ將來ニ於テ聯盟トシテモ右事實ニ顧ミ其ノ態度ヲ改ムルノ要ナキヤ聯盟ニ一大勢力ヲ有スル貴大臣ノ所見如何ト訊ネタル處外相ハ滿洲國カ獨立國トシテ充分發達ヲ爲シツツアル事實ハ之ヲ否定スルコトヲ得ストスルモ聯盟カ決議シタル**ドクトリン**ハ之ヲ飜スコトヲ得ス換言スレハ**ドクトリン**トシテハ滿洲國承認ニ反對セサルヲ得サルモ事實問題トシテ同國カ生長シ行ク事ニ對シテハ彼是云フヘキ筋合ニ非スト回答セルカ其ノ口吻ニ依レハ主義上滿洲國ノ承認ニ對シテハ贊成出來サルモ事實ニ於テ滿洲國カ着々獨立國トシテ發達スレハ問題ハ自然ニ解決スルニ非スヤ羅國トシテハ寧ロ之ヲ希望スルモノナリト言ハントスルカ如ク見受ケラレタリ

右何等御參考迄ニ報告申進ス

57　昭和10年3月20日　在独国武者小路(公共)大使より広田外務大臣宛(電報)

再軍備宣言に対する周辺諸国の反響を独国側は比較的楽観視し他方英国国璽尚書の東欧諸国訪問の諸国に及ぼす影響には注視について

ベルリン　3月20日後発
本　省　3月21日前着

第五二號

獨逸再軍備公表後伯林外交界ハ擧ケテ歐洲政局ノ推移ヲ凝視シ居レルハ勿論ナルカ其ノ變轉ノ重要ナル鍵ヲ握リ居ル英外相ノ訪問前ニハ何等事態見透シツケ得サルモノト一般ニ考ヘ居レリ但シ獨逸今回ノ强硬態度カ內獨逸民心ノ作興ト結束ニ有效ニシテ外直ニ政治的ニモ經濟的ニモ實質的不利ヲ誘致スルトノ虞無キコトヲ信シツツ其ノ間ニ軍備ヲ充實シ他國ヲシテ獨逸ニ對シ一指ヲ染メ得サル優越ナル地位ニ到達セントノ復(腹カ)案ナルヘキハ疑ヲ容レス又其ノ反響トシテ獨ハ益々孤立シ相手國ハ益々團結シ墺太利併合モ暫クハ見込薄ナルヘク唯一ノ友邦波蘭モ去就ニ迷フ危險アルヘキカ獨逸今日ノ心理狀態トシテハ自己ノ武力カ自國ノ將來ニ對スル唯一ノ鍵ニシテ之サヘ成就セハ個々ノ具体案件モ獨ニ有利ニ展開スルモノト確信シ隣邦ノ思惑等ハ苦ニナラサルモノト觀測スル者多シ但シ此ノ間ニアリテモ相當獨逸側ノ神經ニ懸リ居ル問題ハ「イーデン」ノ波、蘇訪問ニシテ其ノ結果波蘭ノ親獨關係ニ罅ノ入ル虞無キヤ又蘇波關係ニ緩和ノ傾向無キヤ又佛蘇同盟英蘇接近等ノ端緒トナラサルヤ等ノ點ナリ

英、佛、伊ヘ暗送セリ

58　昭和10年3月20日　在独国武者小路大使より広田外務大臣宛(電報)

独国再軍備宣言に対する対応について在独国英国大使および仏国大使より聴取について

ベルリン　3月20日後発
本　省　3月21日前着

第五三號

獨[(1)]逸再軍備公表ニ關シ二十日英佛兩大使內話要領左ノ通

「英」
右公表後「サイモン」ノ來獨ハ佛政府ニテ餘リ快シトセサル模樣ナルモ此ノ上ノ破局ヲ防ク爲ニハ獨逸不遜ノ態度モ英國式ニ之ヲ甘受シ何ントカ局面ヲ好轉セシムル必要アリ即チ英國トシテハ獨逸ヲシテ二月三日ノ「コムニケ」ノ諸點ヲ全部不可分ニ承諾セシムヘク最善ノ努力ヲ拂フコトトナルヘシ但シ最難關ハ東方協定及獨逸此ノ上ノ軍擴阻止ノ點ニテ差當リ成功ノ見込等立チ居ラス要ハ「ヒットラー」氏ノ臨機的態度ニ期待ヲ繋クノミナリ尚「イーデン」ノ露國訪問ハ決シテ佛、英、蘇ノ接近等考ヘテノコトニ非ス唯東方協定ニ關スル英國側支持ノ方針ヲ良ク諸政府ニ説明セントスルモノナリ獨逸今回ノ宣言カ「ヴエルサイユ」條約ノ違反ナルコトハ明瞭ナルモ差當リ英獨次テ英、佛、伊、獨間ニ意見交換ヲ行フヘク平和條約調印國全部又ハ聯盟ニ於テ右ヲ問題トスルコトトナルヤ否ヤ當方ニテハ承知シ居ラス或ハ右ニ關シ明二十一日「サイモン」カ議會ニテ意見ヲ發表スルヤモ知レス云々

「佛國」[2]
再軍備聲明ハ早晩起ルヘキコトト豫想シ居タルモ恐ラク「サイモン」訪問後ナルヘシト見當ヲ付ケ居タルニ寔ニ青天霹靂ナリ本使ハ「ヒットラー」氏ニ即座ニ條約違反ヲ抗議シ置キタルカ今夜カ明日位巴里ヨリ正式ノ抗議申込方訓令アル筈又條約違反ノ點ニ付佛國政府ハ差當リ少クトモ聯盟理事會ノ召集ヲ要求スル積リナルカ如シ英國カ十九日拔駈ケノ抗議ヲ獨逸ニ發シ又「サイモン」カ獨逸ノ侮辱的態度ニ拘ラス尚來獨ヲ承諾セルハ頗ル遺憾ナリ獨逸ノ今日ノ態度ニテハ問題解決ノ曙光等見ヘ相モナシ殊ニ獨逸ハ海軍擴張ヲ準備シ乍ラ差當リ之ヲ控ヘ英國ノ歡心ヲ買ヒ英佛ノ離間ヲ計ルヤニモ察セラル又東方協定ハ佛蘇接近當時蘇聯ヨリ直ニ同盟ヲ提議シ來レルヲ敬遠スル爲佛側ニテ案出セルモノニシテ佛トシテハ實ニ重要問題ナル處英國ノ態度煮切ラス今後ノ見据モ付キ兼ネ居レリ又波蘭ハ獨逸ノ秘密軍擴ノ初ニ佛ニ對シ武力干渉ヲ慫慂シタルモ佛ハ英ノ躊躇ニ逢ヒ右ニ應シ得ス其ノ結果波蘭ハ佛ヲ離レテ獨逸ニ接近セルモノナル處今獨逸無制限ノ軍擴ニ逢ヒ多少進退ニ迷ヒ始メタリト想像ス要スルニ政局ハ混沌タリト言フノ外ナキモ此ノ上ハ事態ヲ靜觀シ有效ノ措置ヲ講スルノ外ナシ云々

59　昭和10年3月21日　在独国武者小路大使より広田外務大臣宛（電報）

独国再軍備宣言につき我が方にも関係ある諸点への対応振りにつき請訓

ベルリン　3月21日後発
本　省　3月22日前着

第五五號

今回ノ獨逸再軍備聲明ニ關シ我方ニ關係アル問題ハ
一、獨逸ノ措置カ平和條約違反ナリヤ否ヤノ點ニ付日本カ主タル條約國ノ一員トシテ如何ナル態度ヲ執ルヘキヤノ點ナルカ若シ此ノ點ニ付何等質問者アラハ壽府軍縮會議ニテ累次聲明セル通リ歐洲諸國ノ軍備問題殊ニ陸軍問題ハ專ラ歐洲關係事項ナルニ鑑ミ歐洲外ノ日本ハ右ニ關シ何等關係ヲ有セス從テ唯事實ヲ凝視シ世界平和ノ爲有利ナル展開ヲ希望スルモノナル旨然ルヘク述ヘ置ク積リナリ
二、又蘇聯邦軍備ノ制限ニ關聯シ日本モ軍備制限ノ用意アリヤ等ノ質問モ豫想セラル（現ニ英大使モ「イーデン」訪蘇ノ節蘇國軍隊ノ制限問題ヲ提出スルヤモ知レス從テ日本軍備制限ニ對スル態度モ或ハ歐洲關係國ニテ承知シタキ場合アルヘシト語リ居レリ）本使トシテハ蘇國カ軍備制限ヲ確實ニ實施スル計畫ノ具体案成リ日本ニ於テ違反ノ危險絶無ナルコトヲ認メサル限リ何等我態度ヲ表明シ得サル意味ノ説明ヲ爲シ置ク積リナリ右ハ差當リ何等問題トナリ居ラサルモ此ノ種ノ問題ニ付何等心得ヘキコトアラハ折返シ御電示ヲ請フ

英、伊、佛、露、壽府ヘ暗送セリ

60　昭和10年3月21日　在独国武者小路大使より広田外務大臣宛（電報）

独国再軍備につき我が国にも通報済みであることおよび独国国内の諸反響に関し同国外務次官より説明について

ベルリン　3月21日後発
本　省　3月22日前着

第五六號

[1]二十日夜外務次官ノ談話左ノ通リ
一、獨逸再軍備ノ件ハ「ヒトラー」ヨリ羅馬、倫敦協議國タル英、佛、伊ト隣邦大國タル波蘭ニ通告シタルノミナルカ

本二十日「デイルクセン」大使ニ電訓シ日本政府ニ通告セシメタリ初メハ日、米ニ通告セント考ヘタルモ壽府軍縮會議ニ於ケル米國ノ態度ハ餘リニ獨逸ニ不利ナリシニ鑑ミ米國ヘノ通告ハ差控ヘタリ（同次官ハ先般「ノーマン、デービス」カ來獨セントシタルトキ體ヨク斷リタルコトアリト附言ス）爾餘ノ國ニハ差當リ通告ノ意嚮ナシ

三、佛ノ抗議ハ二十一日午前十一時佛大使カ「ノイラート」ニ提出スル筈、伊國モ殆ト同文ノ抗議ヲ近ク提出シ來ルヘシ又二十三日巴里ニテ「ラバル」、「イーデン」、「スーヴイチ」ノ會談アリ「イーデン」ハ二十四日伯林着ノ筈、「サイモン」ハ直接倫敦ヨリ同日來伯二十七日歸倫ノ筈

尚佛ノ希望ニ依リ聯盟理事會ノ召集ヲ見ルモ獨ハ勿論參加セサルニ付結局理事會決議ヲ見ル位ナルヘシ

三、抑々今回ノ國民徴兵制布告ハ主トシテ對内政策ニ出テタルモノニシテSASS及國防軍ノ低率ノ爲「ヒトラー」モ過去一年間以上ニ惱マサレタル結果右措置ヲ斷行シ國民ノ士氣ヲ統一作興セルモノニテ成績非常ニ良シ

四、[2]「サイモン」來訪ニ對スル獨逸ノ態度ニ付テハ實ノ處外務省ト「ナチス」トノ間ニ相當意見ノ疎隔アリ外務省ハ或ル程度英ト妥協スルコトヲ獨逸將來ノ爲必要ト考ヘ居リ例ヘハ東方協定ニ付テモ在英大使ト「サイモン」トノ間ニ共同援助ヲ拔キタル相當骨拔案ノ話合モアリ此ノ際多少英國ノ希望ニモ應シ度ク考ヘ居レリ（元來英國ハ表面東方協定ニ贊成シツツ自國ニ對スル拘束力ハ之ヲ回避スヘク努力シ居レリト附言ス）之ニ反シ「ゲーリング」「ゲツベルス」等ハ今猶排英主義ヲ主張シ居レリ幸ヒ「ヒトラー」ハ非常ナル實際家ニテ近來「ノイラート」ノ意見ヲ傾聽スル傾向强クナリ來レルニ付此ノ際何トカ名案ヲ得テ少クトモ獨、英關係ヲ惡化セシメサル樣努メ度シ素ヨリ佛英關係ハ差當リ多少冷却ノ兆アルモ長キ歴史モアリ之ニ對シ獨英接近ハ至難ノ業ニシテ此ノ所「ノイラート」ノ苦心ヲ要スルハ勿論ナリ

五、[3]空中協定ニ關シテハ當初英ノ提議アリタル際ニハ右參加ニ依リ獨逸再軍備ノ權利ヲ公認セシメント考ヘタル爲乘氣トナリタルモ今回再軍備ヲ聲明シタル以上正直ニ言ヘハ獨逸ニ取リ興味無キ問題トナレリ但シ「サイモン」ノ苦境モアリ之亦何トカ妥協點ヲ見出シ度シ

六、海軍ニ付テハ人員ノ充實訓練ト機材ノ製造能力ノ向上ニ

全力ヲ擧クヘク船舶ノ製造ハ差當リ控ヘ置クヘシ理由ハ陸空軍編成モ未完成ノ今日海軍ニ手ヲ延ス程財政ノ餘裕モ無ク又獨逸海軍將來ノ目標ハ「バルチツク」海ニ於ケル對蘇作戰ナル處差當リ英海軍ノ監視ヲ受クルニ於テハ或ル程度ノ艦船等餘リ實益無シ云々

英、佛、伊、波蘭ヘ暗送セリ

61　昭和10年3月23日　在独国武者小路大使より広田外務大臣宛（電報）

独国の政情および同国の連盟復帰問題等につき在独国米国および伊国大使等からの聞込みについて

ベルリン　3月23日後発
本　省　3月24日前着

第五九號

廿二日米國伊國兩大使及元一般軍縮米國全權「ギブソン」大使（現伯剌西爾大使）トノ會談中ヨリ御參考迄

（米大使ハ「ギ」カ突如來伯シ白耳義公使ノ所ニ滯在中ナルカ米政府ヨリ如何ナル使命ヲ受ケタルヤ不明ナリ但シ同氏從來經驗モアリ歸來（編注）米政府ニ對シ歐洲政情ノ報告ヲ爲サハ米政府ノ對歐政策ニハ相當ノ影響アルヘシト内話セルカ偶然同白耳義公使晩餐ニテ出會ヒタル處同大使ハ實ハ賜暇ニテ遊ヒニ來レルニ過キス從テ此ノ際各國ノ大官ト會見スレハ華府カラ私設外交ハ不要ナリト叱ラルル虞アリ其ノ爲華府（ワシントン）ニモ巴里ニモ行カス是ヨリ「ブラツセル」倫敦ヲ經テ歸米スヘシト語レリ同氏ノ意見モ合セ報告ス）

一、獨逸政情

米大使談、「ヒツトラー」ハ愈順境ニ入レリ同氏ニ借スニ多少ノ妥協性ヲ以テセハ誠ニ絶好ノ獨逸指導者ナリ

伊[2]大使談、「ヒ」氏ノ地位確立シタル今日外交上其ノ右腕タル「リツベントロツプ」カ「ビユロウ」次官ニ代ルカ或ハ進ンテ「ノイラート」ニ代ルモ自分ハ別ニ意トセス但シ獨逸外交ノ爲現大臣次官ヲ失フコトハ大損失ナリ

「ギブソン」談、本日猶太人有力者ト會談セル處同氏ハ自分等ノ排斥ヲ受ケタルニ不拘「ヒ」氏ニ非サレハ現下ノ獨逸ヲ救フ者ナシト述ヘタリ之ニ鑑ミルモ「ヒ」氏ノ地位存續ハ獨逸勃興ノ爲必要ナリト考ヘラル「ヒ」氏モ「マイン、カンプ」著述時代トハ大部變リ其ノ心情ヲ漸次緩和シ來リタルハ注意スヘシ

二、今回ノ宣言ニ對シ米政府ノ態度ニ付米國大使ハ未タ何等訓令ヲ受ケ居ラサルモ惟フニ米トシテハ過去ハ餘リ問ハス（平和條約違反ヲ論スレハ列國中無庇者ナトナカルヘシト唱和ス）

三、獨[ママ](3)ノ聯盟復歸ニ關シ米大使ハ「サイモン」「イーデン」ハ極力右ニ努力スヘシ從テ其ノ可能程度ハ俗ニ云ヘハ五分五分ナリ又米國ノ聯盟反對新聞モ近來改宗スルモノ多ク聯盟援助ノ傾向ハ米國ノ朝野ニ顯著トナレリト語リ伊大使ハ差當リ英獨交渉次テ獨ト英佛伊トノ交渉等起ルヘク漸ク「ムツソリニ」ノ四國會商ニ近ツクヘキモ獨ノ聯盟復歸ハ聯盟ノ組織變改前ハ望ナシト述ヘ「ギ」大使ハ曾テ日支事件ノ際自分ハ「サイモン」ニ歐洲人ハ總テノ問題ハ壽府ヲ通過ストノ偏見ヲ有スト注意シタルコトモアリ獨ノ聯盟復歸ハ想像出來スト語レリ

三、今回ノ宣言ニ關スル伊ノ態度ニ付伊大使ハ伊トシテハ行懸リ上條約違反ヲ責メタルモ實際ハ今後ノ解決ニ重點ヲ置クコト勿論ナリ「サイモン」來獨ノ節「ヒツトラー」ハ英ト妥協スル爲三六師團計畫ヲ三三師團位ニ止ムルコトヲ解決スヘシトノ噂アルカ其ノ程度ニテハ孰レノ國モ承認セサルヘシト述フ

四、東方協定ニ付テハ米伊兩大使トモ成立ノ望ナシト述ヘタルカ伊大使ハ元來本協定ハ伊ニ於テ何等興味無シ但シ獨カ共同援助ヲ拒ム理由ヲ諒解セスト附言ス

五、(4)墺太利併合問題ニ付伊大使ハ「ヒツトラー」カ「ベニス」ニ於テ「ムツソリニ」ト會見ノ節自分ハ立會ヒタルカ「ヒ」ノ本問題ニ對スル態度ハ想像以上ニ強硬ニシテ「ム」ニ對シ墺太利ハ低腦ノ寄合ナリト罵倒セリ但シ「ヒ」ノ併合ノ意味ハ土地併合ヨリハ「ナチ」化ノ點ニ重キヲ置キ所謂gleichschaltung ヲ希望シ居ルモノナリ現ニ墺太利内「ナチ」ノ跋扈ハ甚タシキニ徴シ如何ナル變革カ起ルヤ豫想シ得ス但シ本問題ヲ獨ニ於テ急ニ實現セントセハ勿論戰爭ニ依ルノ外ナカルヘシ

六、軍縮ノ實現ニ付テハ「ギブソン」ハ露國等ヲ加ヘテ軍縮ヲ爲ス爲監督制度等ヲ考究スルモ無意味ナリ精神的ニ相互ノ信頼ノ起ラサル間ハ軍縮實現覺束ナシト語ル要スルニ現在ノ無力ナル聯盟若ハ軍縮會議ニテハ駄目ナリ成ルヘク歐洲大國間ノ商議ニ依ルノ外ナシトノ意見ナリ米國ハ差當リ傍觀的態度ヲ執ルヲ妥當ト認ムトノ意見ナルカ如シ

英露、佛伊、壽府ヘ暗送セリ

編注　「來」の箇所に「米?」と書込あり。

62　昭和10年3月24日　在仏国佐藤大使より広田外務大臣宛（電報）

独国再軍備宣言に対する英仏両国の対応振りにつきそれぞれの国の内部事情に関する諜報者からの情報について

パリ　3月24日後発
本省　3月25日前着

第九六號（極秘）

獨逸再軍備聲明ニ付諜報者内報左ノ通（二十三日）

「サイモン」ハ最近獨ノ聯盟復歸英獨接近ヲ自ラ實現シ「マクドナルド」ニ代ラントノ野心ヲ懷キ居リ其ノ政友「ロシアン」卿ノ「ヒトラー」訪問等ニ依リ之カ工作ニ努メ來リ之ニ反對ナル「ボールドウイン」「イーデン」等ハ獨軍備ニ關スル白書ノ發表ヲ要求シテ「サ」ノ工作ヲ邪魔シタル有樣ナルカ兩人カ「サ」ノ書キタル十七日附對獨「ノート」（佛ト協議セス）ニ反對シ得サリシハ次ノ總選擧ニテ兩人反對ノ事實ヲ逆用サルルヲ惧レシカ爲ナリ

佛ハ獨カ十六日聲明ヲ爲スヤ直ニ在英、伊大使ニ訓電セルモ右ハ單ニ英伊政府ノ態度ヲ尋ヌル丈ナリキ元來「ラバール」ハ「レジエー」等專門家ノ意見ヲ輕視シ來レルカ今回ハ遂ニ「レ」ノ意見勝チ不誠意ノ獨ヲ其ノ儘聯盟ニ復歸セシムル能ハストテ英ノ意見ニ反シ聯盟附議ヲ決行シタリ勿論其ノ結果ニ大ナル期待ヲ掛ケサルモ獨ニ對スル主義上ノ詰問決議位ハ贏チ得ルコトト豫想ス佛ノ「コモ」三國會議提議ニ對シ「サ」ハ獨ノ參加ヲ希望シタルモ佛カ反對三國丈ニ止マリタリ

今回獨ノ行動ハ前述「サ」ノ對獨態度及「フランダン」内閣内政上ノ立場弱キニ乘シ之ニ依リ英佛ヲ離間シ其ノ結果次第ニテハ更ニ非武裝地帶廢止等次々ニ新ナル既成事實政策ニ出ツル腹ナルヘキカ右ノ結果二十二日佛下院ノ佛伊協定承認決議（五五五對九）ニテ見ル如ク「フ」内閣ノ立場幾分強クナリタルハ事實ニシテ或ハ明年總選擧ノ結果カ右傾スルカ如キコトモ有リ得ヘシ他方墺太利カ「ナチス」化セントスル危險ヲ苦ニスル伊太利ハ二十一日ノ對獨抗議ニ

付豫メ佛ト協議スル等仲々佛ニ接近シ居レリ「ラバール」ハ「ザール」問題ヲ平穏ニ解決シタル後何トカ佛獨關係ヲ纒メントノ腹アリシ爲最近東歐協定交渉ヲ幾分遷延シタルヤノ形アリシカ今回獨ノ暴擧ノ結果判然シ訪蘇（四月後半ト言ハル）ノ上ハ佛、蘇、土「バルト」三國間位ニテ協定ヲ一應纒ムルカ如キ結果トナルヤモ知レス云々（本電冒頭英政府内輪揉メノ件ハ素ヨリ眞否保證シ難キモ巴里ニテハ專ラ右樣ノ觀察行ハレ居レリ）

獨、英、伊、蘇、米ヘ轉電シ他ノ在歐大使、壽府ヘ暗送セリ

〰〰〰〰〰〰〰〰〰

63 昭和10年3月26日　広田外務大臣より　在独国武者小路大使宛（電報）

独国の再軍備宣言の背景には欧州諸国の軍拡傾向があるとの在本邦独国大使による広田外務大臣への説明について

本　省　3月26日後7時発

第一九號

三月二十二日在京獨逸大使本大臣ヲ來訪、先ヅ今回獨逸ガ徵兵制度採用ヲ決定セルハ佛國ノ兵役年限延長、英國最近ノ軍擴案、蘇國ノ軍備狀態、對獨政治的結合ノ續出、軍縮ノ前途絶望、英佛等ニ於ケル獨逸軍備狀態ノ明示要求等ニ基クモノナルコトヲ說明セル上獨逸トシテハ多數國間協定ノ既定事實ニ束縛セラル、ハ「プレステイヂ」上忍ビ難キニ依リ英佛倫敦宣言ニ對シテモ先ヅ英國トノミ談合スヘキ旨答ヘ置キタルガ來ルベキ英獨會商ニ於テ英國側ハ一年前ノ「イーデン」案ヲ蒸シ返スコト無キヲ保セザル處獨逸ハ右ヲ基礎トシテ商議スルヲ欲セザル爲此際確然タル措置ヲ取ルコトトシタル次第ニテ交渉ガ全然對等ノ基礎ニ於テ行ハル、コトヲ希望シ居リ、尙國際聯盟ハ獨逸ニ於テ甚シク不評ナルヲ以テ復歸ノ可能性無カルベシト述ベ、次デ本邦新聞論調ガ一般ニ獨逸ノ立場ニ理解ト同情トヲ有スルハ感謝スル所ナリトノ趣旨ヲ申入レタルニ付本大臣ヨリ獨逸今回ノ措置ハ歐洲諸國ノ軍擴傾向ニ應シタルモノナラムモ現下ノ事態ニ於テハ戰爭等ノ如キ危機ヲ誘致スルコト無カルベシト思考スト述ベ置キタリ

英、佛、白、伊、蘇、壽府ヘ轉電アリタシ。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰

64 昭和10年3月29日　在ポーランド伊藤（述史）公使より　広田外務大臣宛

対ソ情報蒐集強化の観点から好適地と思われるエストニアに我が方公館を設置し予算上困難な場合には在ポーランド公使館管轄とすべき旨意見具申

（4月27日接受）

機密公第六二號

昭和十年三月二十九日

在波蘭

特命全權公使　伊藤　述史［印］

外務大臣　廣田　弘毅殿

對「エストニア」關係ニ關シ意見上申ノ件

昨年「エストニア」ト通商取極ヲ締結シタル後同國ニ名譽領事館設置ノ件ニ關シ上申シタル際ニハ此種問題ハ一ニ「バルチック」地方ニ對シ公館ヲ新ニ設置セラル、御方針ナリヤ否ヤニ係ルモノト思考シ當方ヨリ意見ヲ申上クルヲ差控ヘタル次第ナリ然ルニ昭和十年度豫算ニモ「バルチツク」諸國ニ新ニ公館ヲ設置スル如キ性質ノ經費計上アル由承知セサルニ鑑ミ通商取極ヲ締結シタル關係上「エストニア」ニ關スル限リ此ノ際何等カ方法ヲ講スルノ必要有之リト思考セラル、ニ付愚見申進ス

意見ノ要点ハ「エストニア」ト通商取極ヲ爲シタル今日近クニハ「ヘルシンキ」「リガ」ニ我國ノ公館アル振合上「エストニア」ニノミ公館ヲ設置セサルニ於テハ同國民ノ我國ニ對シ折角有スル好感情ヲ減却セシムルコト、ナリ對蘇關係ノ將來ヨリ見テ不利益ナリト思考セラルルニ付「エストニア」ニモ公館ヲ設置セラル、コト望マシク豫算ノ都合上直ニ其ノ實行ヲ見ルコト困難ナルニ於テハ其レ迄ノ一時的便法トシテ在波蘭帝國公使館ヲシテ「エストニア」國ヲ管轄セシムルヲ適當トスト云フニ在リ

右ノ理由ニ關シテハ大体對蘇情報及策動竝ニ對日感情ノ三点ヨリ觀察スルコトヲ必要トス

第一、本使着任以来對蘇情報蒐集ノ点ヨリ沿「バルチック」諸國ノ價値ニ關シ研究シ居タルカ「リガ」「タリン」等ハ全地ヲ往復スル「ソヴィエト」人民又ハ外國人等ノ齎ラス情報或ハ又「ソヴィエト」内地ヨリノ各種ノ方法ニ依ル通信等ヲ蒐集スル爲メ竝ニ是等政府ノ有スル情報ヲ求ムル点ニ於テハ相當意義アルニ付斯ル情報ヲ蒐集スル爲ニハ可成廣ク人的接觸ヲ求ムル必要アルヘクコノ点ヨリ「リガ」以外

更ニ「タリン」ニ公館ヲ置クコトノ利益ナルハ言ヲ俟タス
第二、對蘇策動ノ見地ヨリスレハ「エストニア」ハ「レットニア」ヨリモ頗ル有利ナル地位ニ在ルコト明瞭ナリ先年波蘭カ蘇聯邦内ニ於テ反蘇策動ヲ爲シ居タル當時ハ主トシテ「タリン」ヲ中心トシ行ヘルモノニシテ右ハ「リガ」ニ於テ之ヲ爲スヨリモ容易ナルニ依ルモノナリ其ノ理由ハ種々アルヘキモ要スルニ「レーニングラード」ニ近ク最モ効果的ニ策動シ得タルニ依ル如シコノ点ハ六年間對蘇策動ニ當リ居タル當國係官ノ本使ニ内話セル所ナリ從テ若シ何等必要アル場合對蘇策動ヲ爲スカ如キコトヲ前提トスレハ常時ニ於テ素地ヲ作ル爲ニモ「タリン」ニ公館ヲ設置スルコト頗ル有意義ナリト思考セラル
第三、對日感情ヨリ見レハ「エストニア」ニ公館ヲ置クコトハ同國民ノ感情ニ對シ滿足ヲ與フルノミナラス延テ我國ノ爲メニ之ヲ利用シ得ルノ機會ヲ作成スル上ニ於テ効果不尠ルヘシ元來「エストニア」人民ハ欧羅巴ニ於テハ芬蘭人、洪牙利人ト同シク所謂「ウラル、アルタイ」民族ノ一種ニシテ眞僞ハ別トシ我國民トハ何等カ人種上ノ關係アル如ク思考シ居リコノ点ヨリシテ「エストニア」人ハ我國民ニ對シテ一種ノ愛慕心ヲ有スルコトハ御承知ノ通リニシテ我國トシテハ此ノ点ヲ深ク考慮スルコト適當ナルヘシコノ点ハ昨年通商協定ノ締結以來本使ニ對シ「エストニア」側ヨリ滿足ナル意思表示又ハ我國ニ對スル興味ノ増加ヲ示ス如キ通信相當多数ニ上レルニ依リテモ知ラル、カ是等通信ニモ「リガ」「ヘルシンキ」等ニ公館アルニ拘ハラス「タリン」ニ公館無キコトニ對シ異口同音ニ深ク遺憾ノ意ヲ表シ居レリ
右ノ如キ諸点ヨリ見「リガ」「ヘルシンキ」ニ公館ヲ有セラル、以上「タリン」ニモ同様ノ公館ヲ設置セラル、コト利益アルノミナラス又必要ナリト思考セラル就テハ可成速ナル機會ニ於テ「タリン」ニモ「リガ」「ヘルシンキ」同様ノ形式ニ於テ我公館設置方御考慮相煩シ度シ
乍併豫算ノ關係上右至急實行困難ナル場合ニハ其レ迄ノ暫定手段トシテ在波蘭帝國公使館ヲシテ「エ」國ヲ管轄セシムルコト、セハ經費ノ支出ヲ要セス單ニ一ヶ年一回位ノ旅行ニテ大体公使館設置ノ目的ヲ達シ得ルコト、ナルヘキニ付一時的便法トシテ御考慮相煩シ度シ蓋シ「エストニア」ト波蘭トハ最親密ナル關係ニアリ或ハ同盟關係スラ云々セラル、位ニシテ在波蘭公使ヲシテ「エストニア」「レットニア」両國ヲ兼任セシメ居ルモノ相當多数ニ上リ居ルヲ以テ我方ニ於テモ一時之ヲ兼任スルモ何等表面上目立タス又ハ奇異ノ感ヲ與ヘサルニ於テ便宜ナルノミナラス各方面ヨリ見テ當地ニ於テ「エストニア」ヲ管轄スルコト實際上容易ナリト思考セラル

目下世界各方面ニ外交御發展ノ秋ニ際シ沿「バルチック」ノ如キ或ハ御考慮ニ入ラサルヤモ計ラレスト存セラレタルニ付同地方ハ特ニ對蘇關係上頗ル重要ナル地位ニ在ルニ鑑ミ敢テ卑見申進シタル次第ニシテ右御諒承ノ上本件實現方何卒御配慮相煩シ度シ
右上申ス

65　昭和10年5月8日　在英国松平大使より広田外務大臣宛（電報）

独国再軍備宣言により欧州政局は不安な状態にあるが英国は独国の出方を見つつ対応する方針とのサイモン外相の談話について

ロンドン　5月8日後発
本　　省　5月9日前着

第一六四號

五月七日[1]「サイモン」ニ會見欧洲ノ政局ニ付意見ヲ尋ネタル處何等御參考迄ニ要點左ノ通
一、過般聯盟理事會ニ於テ「リトヴィノフ」カ條約違反國ノ制裁方法攻究ニ當リテハ欧洲以外ノ地方ニモ適用方考慮スヘシト主張セルニ依リ貴大臣カ言下ニ之ニ反對セラレタル旨「タイムス」ニ現ハレタルカ右ハ事實ナリヤト尋ネタルニ「サ」ハ差當リ欧洲ノ不安ヲ除去スル爲論議シ居ル際ニ他ノ地方ニ於ケル問題ヲモ右會議ニ於テ論議スルノ不可ナルヲ述ヘタルハ事實ニシテ例ヘハ吾人ニ利害關係少キ南米ノ問題ニ付論議スルノ不可ナルコトヲ説キタリト答ヘタリ
二[2]、本使ハ欧洲全體ノ政局ハ甚シク危險ナル狀態ニアリト思考セラルルヤト尋ネタルニ「サ」ハ自分ハ very dangerous トハ思ヒ居ラサルモ獨逸ノ執リタル處置ノ爲欧洲一般ニ real anxiety ヲ生シタルコトハ事實ナリ本月十五日「ヒトラー」ハ外交方針ニ關シ演説スル趣ナルカ若シ右演説ニシテ過激ナルモノナルニ於テハ英國トシテモ相當强キコトヲ言ハサルヘカラスト考ヘ居レリ英國トシテハ國防上獨逸ヨリ劣等ノ地位ニ居ル能ハサルモ（空軍ヲ意味

ス）獨逸カ穏カニ出ツル限リ出來得ル丈溫和ノ態度ヲ執ル積リナリ

三、海軍問題ニ關シ獨英會商ノコトヲ尋ネタルニ祝典後直ニ行フ積ナリシ所前顯「ヒトラー」ノ演說後ニ行フコトトナリシニ付今月末位ノコトトナルヘシト述ヘ又英國政府ハ既ニ獨逸カ「ベルサイユ」條約ノ制限以上ニ建艦スルコトヲ「アドミット」シ居ラルルヤト尋ネタルニ「サ」ハ今日迄之ヲ「アドミット」シ居ラサルモ合意ニ依リ協定成立セハ之ヲ以テ「ベルサイユ」條約ノ制限規定ニ代ヘンコトヲ考ヘ居ル次第ナリト答ヘタリ

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

66　昭和10年5月20日　在ポーランド伊藤公使より広田外務大臣宛（電報）

独国側は日ソ開戦を待って策動を開始することを企んでいるとの仏国外相の推測に対し日ソ間の現状より開戦の見込みなしと反論について

ワルシャワ　5月20日後発
本　　省　5月21日前着

第一二二號

十八日[1]「クラコウ」ノ「ピ」元帥葬儀後佛外相ト會談ノ際「ラ」外相ハ今回ノ莫斯科訪問カ餘リ重要ナル意義無キ旨ヲ語リ本使モ可然ク豫想シ居タル旨ヲ答ヘ話題ヲ獨逸ヲ中心トシ歐洲全般ノ政局ニ移シタルニ同外相ハ

㈠獨逸最近ノ態度ハ其ノ隣邦諸國ヲ威嚇スルノミナラス各國ヲ驅ツテ軍備競爭ヲ開始セシムルニ至リ頗ル寒心ニ堪ヘス從テ各國カ獨逸ニ對シ防禦的態度ニ出テントスルコトハ明瞭ニシテ例ヘハ「ストレーザ」會議ニ於テモ英佛伊ノ如キ一議ニ及ハス對獨共同戰線ヲ張ルコトニ意見ノ一致ヲ見タル程ナリ

㈡素ヨリ自分ハ歐洲ノ平和ハ独佛ノ妥協ニ依リテ初メテ得ラルルモノト信シ居ルモノナルカ獨逸ノ出方カ餘リ突飛ナル爲手ノ出シ樣モ無キ次第ナリ元來獨逸ノ要求ニ關シテハ獨逸ハ漠然ト總テノ方面ニ於テ完全ナル獨立ヲ希望スト云フノミニテ英外相伯林訪問以後獨逸側ヨリ明瞭ナル說明ヲ與ヘタルコト無ク獨逸自ラ其ノ要求全部ヲ明確ニ認識セサルモノカトモ推測セラルル有樣ナルニ付自分トシテハ何時ニテモ交渉開始ノ用意アルコトヲ表明シ居ル次第ナリト內話シ

㈢[2]只獨逸ノ政策ニ付明瞭ナル一點ハ一二年ノ內ニ日蘇開戰ノアルヘキヲ豫想シ斯ル機會ニ策動セント準備シ居ルモノノ如シトテ日蘇關係ニ言及シタルニ付本使ヨリ日本ハ蘇ト戰爭セスト斷言シ能ハサルモ日蘇關係ノ現狀ヨリ見テ少クトモ一年位ノ間ニハ日蘇開戰ニ至ルコトナカルヘシ蓋シ日蘇間目下ノ懸案ハ主トシテ經濟問題ナレハ蘇政府ニ於テ多少讓歩セハ解決シ得ヘク且廣田外相ニ於カレテモ折角外交工作ニ努力中ナレハ日蘇間ノ開戰ト言フ如キ假說ニ立脚セントスルカ如キ政策ハ甚タ愚ナルモノト言フヘシト答ヘ置キタリ

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

67　昭和10年7月8日　在伊国杉村大使より広田外務大臣宛

英国国際連盟相のローマ訪問後における軍縮問題、伊エ紛争問題、安全保障問題等に関する欧州諸国の動向について

機密第二一五号
昭和十年七月八日　（8月13日接受）

在伊
特命全權大使　杉村　陽太郎（印）

外務大臣　廣田　弘毅殿

「イーデン」「ムッソリーニ」會談ニ關スル件

六月「ローマ」ニ於ケル「イーデン」「ムッソリーニ」會談ニ關シ主トシテ諸方面ヨリ聞込ミタル所ニ基キ別紙ノ通報告ス尚右內容部外ニ漏レザル樣御注意相成度シ

「イーデン」「ムッソリーニ」會談

一、會談

六月二十四日ヨリ三日間「ローマ」ニ滯在「ムッソリーニ」ト二回會見セル「イーデン」ハ「ローマ」出發前本使ニ「ローマ」ニハ「トゥリスト」トシテ幾度モ來遊シ親ミ深キ土地ナルカ今回ハ豫テ覺悟ハシタルモノヽ、十分ノ收獲ナクシテ去ル次第ナレバ心苦シト述ベタルガ終始本国政府ト聯絡ヲ執リ一一其ノ指令ヲ受ケテ交渉シタレバ「ストレーザ」ニ於ケル「マクドナルド」首相及「サイモン」外相ノ如ク自由ニ意見ヲ述ベ責任ヲ以テ約諾ヲ與ヘ得ズ從テ国務大臣ナルモ其ノ權能實ハ在伊大使ト擇ブ所ナク又「ネゴシアトール」トシテハ夙ニ当代一ノ令名アルモ荒馬ノ如キ「ム」ニ

対シテハ一寸歯ガ立タザリシモノ、如ク況ヤ英独海軍協定ガ佛伊ノ態度ヲ凍結セシメ「グランディ」大使ガ最近歸國シナガラモ郷里「ボロニア」ニテ手術ヲ受ケ「ム」「イ」ノ間ニ立チ斡旋ノ労ヲ執リ得ザリシニ反シ「シャンブラン」大使ガ「ラヴァル」首相ノ旨ヲ受ケ「パリ」「ローマ」ニ活躍シテ佛、伊ノ結束ニ力メタルアリ夫レガ爲一時ハ「ストレーザ」以來ノ三國協調ガ英ノ責任ニ於テ弛緩セントスルカニサヘ察セラレタレハ「イ」「ム」ノ會談ハ稀ニ見ル悪気流ヲ縫ツテ進メラレ特ニ「エティオピア」問題ニ至リテハ「イーデン」ハ態々植民省ノ Geoffrey Thompson ヲ帯同シテ徹底的ニ意見ヲ交換セントシタルモ伊ノ専門家 Gnarschelli ガ「イ」ノ來着ノ前日蘭國「スケーヴニンゲン」ノ伊「エ」和協委員會ニ出張シタルガ爲細目ニ亘ル具体的交渉不可能トナリ且「ム」ガ「エティオピア」問題ニハ第三國ノ口出シヲ絶対ニ排斥スル旨数次公言セル行懸リモアリ交譲妥協ノ時機未ダ熟セズ從テ主トシテ腹ノ探合ヒニ終始シタルモノ、如ク尤モ五月下旬以來伊ノ新聞紙カ「エ」問題ニ対シ英カ宛モ聯盟ノ代辯人タルカノ態度ヲ執ルヲ憤リ口穢ク英ヲ罵リ英伊ノ傳統的友好関係ニ未曾有ノ亀裂ヲ生ジ（「グランデイ」大使ハ之ニ対シ尠ラズ不滿ヲ抱クト聞ク）タリシモ「イーデン」ノ來訪ニ依リ英ガ佛伊ト離レテ独ニ近付キ巧ニ両者ヲ操ランカノ疑惑モ一掃セラレ英ニ「ストレーザ」決定ノ精神ヲ以テ能フ限リ佛伊ト協調スルノ誠意アルコト明トナリタレバ新聞論調モ常調ニ復シ（六月二十八日「ドラモンド」曰ク伊ノ新聞ハ英ヤ佛ノ夫レト異リ何レモ政府ノ統制下ニ置カル、モノナレバ其ノ論調ニ対シ政府ハ責任ヲ回避スルコト能ハズト）「イ」「ム」會談其ノモノハ殊ニ「エチオピア」問題ニ付果実ヲ結ビ得ザリシモ「イ」ハ出立前特ニ英國新聞記者團ニ対シ「幸ニ誤解ガ一掃セラレタルト共ニ將來ノ平和建設ニ引續キ努力スル旨話合ヲ遂ゲタリ」ト発表シタレバ引續キ問題解決ニ努力セントスル腹ナルハ言フ迄モナシ

(ママ)

(二)軍縮問題

(一)「イーデン」ノ「ローマ」訪問前後ニ於ケル欧洲政局ハ相当複雑ナル情勢ヲ呈シ英ガ遽シク独ト海軍制限協定ヲ結ビ又空軍協定ヲ陸軍協定、中欧及東欧規約ヨリ引離シテ直チニ締結セントスルカニ察セラレタルニ対シ佛ハ其ノ死命ヲ制スル陸軍々縮問題ニ付人口不足ノ爲独ノ五十五萬ト拮

抗スルコト能ハサレバ陸、海、空軍ノ連帯關係、一般會議ニ依ル軍縮ノ決定及平和不可分ノ主義ニ則リ東欧及中欧ニ於ケル安全保障ノ強化ヲ強調シ乍ラモ他面目下内政上重大ナル危機ニ直面シ且「ロカルノ」協定ヲ以テ外政ノ基調トシ一面伊ト結ブモ実ハ安ンジテ伊ノミニ頼リ得ズ独ニ対スル関係上英トハ到底離レ得ザル立場ニ在ルヲ自覺スレバ新聞ノ論調ガ反英的ナル程責任アル政府当局ハ英ニ反抗セズ「ラヴァル」ハ寧ロ自重シテ「イーデン」ト折衝シタルモノ、如ク唯々英ガ海軍問題ノ如キ自國ノ存立ニ「ヴァイタル」ノ関係アリト認ムルモノニ付テハ兎角單独ニ進退ヲ決スル習性アルニ顧ミ空軍協定ヲ始メ「ロンドン」聲明「ストレーザ」決定諸問題ノ処理ニ付テハ是非共佛ト一致ノ歩調ヲ執ラシメントスルモ英ハ確然タル約束ヲ結ビ形式的ニ拘束セラル、ヲ欲セズ「ストレーザ」決議中ニ The three Powers were anxious to join in every practical effort for promoting international agreement on limitation of armaments トアルヲ指摘シ英佛伊ノ協調ニ付テハ実際上ノ必要ニ應ジ其ノ都度適当ニ按配スベシト爲ス

(二)英独海軍協定ハ六月二十四日ノ「タイムス」ガ指摘セルガ如ク英ノ立場ヲ受動的 (negative) ヨリ能動的 (positive) ニ転化シ一方独ノ製艦競争ニ脅サル、虞ナキニ至レルニ反シ他方英ガ率先シテ海軍制限ノ舵ヲ執リ得ルコトトナリ假ニ佛ニ五割ヲ與フルモ祐ニ二國標準主義ヲ維持シ得ベク之ニ反シ佛伊ハ動々モスレバ建艦競争誘致ノ責任ヲ負ハサル、危険アリ

英独海軍協定ニ対スル英ノ言分ハ外觀上ハ單独ニ締結シタルガ如ク見ユルモ実質的ニハ率先シテ一般軍縮協定ノ端緒ヲ開キタルモノナレバ佛伊其他一般ノ利益ニ貢獻スト爲スニ在リ独ガ一方的ニ且無制限ニ軍拡ヲ敢行セントスルニ対シ機ヲ逸セズ制限ヲ協定シタル英ノ功ハ沒スベカラズ而シテ此ノ點尠クトモ伊ニ於テハ充分ニ理解ス（七月「スヴィッチ」内話）

比率ニ付六月廿八日「ドラモンド」ハ佛ハ英ノ五割即チ独ノ十四割強ヲ要求スベク右ニ対シ英独ニ異存ナキモ伊ノ均等要求ニ対スル佛ノ態度ハ不明ナリト語リ且右ハ極メテ機微ナル関係ヲ有スル問題ナレバ英トシテハ一切口出シセズ其ノ解決ヲ佛伊両國ニ委スル腹ナリト言ヘルガ七月一日「スヴィッチ」ハ伊ノ均等要求ハ絶対的ノモノニテ例ヘバ

地中海ニ於ケル均等ト言フガ如キモノニハ非ズト断言シ解決ノ困難ナルハ固ヨリ覺悟スト附言セリ

佛伊ノ均勢ハ佛ガ新ニ独ニ備ヘザルベカラザルニ至レルガ爲地中海ニ於テハ実現容易トナリタルモ伊ノ目標ハ一般政治的見地ヨリ假令形式的ナリトモ欧洲大陸最強ノ海軍國ト同列ニ立ツノ權利ヲ獲得セントスルモノナレバ之ト佛ノ國防上現実ノ必要トヲ如何ニ調和スベキヤ殆ド其ノ見込立タス而シテ是レ英ガ Building Program ノ公表程度ニテ一先ヅ海軍々縮協定ヲ片付ケントスル理由ノ一ナリ

英ハ北支及廣西ニ対スル我策動ヲ誇張視シ欧洲各國ガ此ノ上内爭ヲ事トスルノ不可ナルヲ思ヒ（此ノ點ハ「リッペントロップ」サヘ公言ス）此ノ際ノ急務ハ速ニ欧洲政局ヲ安定セシムルニ在リトシ而シテ軍縮問題ノ討議ハ反テ軍縮ノ実現ヲ困難ナラシムルノミナラズ比率問題等ニテ國民心理上最モ「デリケート」ナル各國ノ權威又ハ体面ノ問題ニ觸レ國際関係ヲ無用ニ悪化シ経済ノ復興ヲ限リナク遷延セシムルヲ好マズ故ニ假令中途半端ノ協定ニテモ一應何等カノ約定ニ纒メ上グルヲ寧ロ賢明ナル方策ナリトシ此ノ主旨ニテ佛伊当局ノ説得ニ努メ且努メントスルモノヽ如シ

次ニ海軍々縮會議準備ノ爲英ガ招請スル専門家會議ニ付「ドラモンド」ハ佛ヨリ近ク専門家ヲ渡英セシムル旨ヲ語リ（六月二十八日）タルモ七月一日「スヴィッチ」ハ「英ノ意嚮ハ英独協定ヲ出發點トシテ一般軍縮協定ヲ完成セントスルニ在ルモ佛トシテハ英独協定ノ存在ヲ認ムル能ハズ（英佛協定ニ依リ新ニ建設セラルベキ独海軍ノ実勢力ヲ考量ニ入レ其ノ必要兵力量ヲ定ムベキハ勿論ナルモ協定其ノモノヲ承認スルコト能ハズ）從テ専門家ノ會談ハ「ワシントン」及「ロンドン」條約ノ基礎ノ上ニ行ハルベシトノ建前ヲ取リ且何時専門家ヲ渡英セシムルヤ未定ノ由ナレハ伊トシテモ暫時成行ヲ傍觀スルノ外ナシト（ママ）述ブ佛伊ノ均等ヲ定メタル「ワシントン」條約ヲ會談ノ基礎トスルハ必ズシモ佛ニ利ナラズ又軍縮ノ一般化ヲ主張スル佛トシテハ寧ロ英ノ腹案通リ進ムベキ筈ナルニ殊更ニ前記ノ如キ態度ヲ執レルハ英独協定ニ依リ裏切ラレタル佛ノ英ニ対スル憤懣ノ情ガ如何ニ切ナルカヲ証スルモノト謂フベシ

英ノ希望ハ此ノ際欧洲大海軍國ノ間ニ丈ケナリトモ出來得ル程度ニテ一應制限協定ヲ結バントスルニアルガ如キモ英独協定ニ対スル佛伊乃至蘇ノ態度険悪ナレバ容易ニ其ノ目

的ヲ達シ得ベシトハ察セラレサルモ英独協定ガ結局軍拡ノ趨勢ヲ誘致シ財政上ノ負擔ヲ加重スルニ至ルベキヲ推断シ英ニ於テサヘ自由黨ノ一部及勞働黨ハ強ク之ニ反対シツヽアル実情ナレハ我ニ於テモ右ハ欧洲問題ナリトテ成行ニ委セテ座視センカ將來或ハ欧ニ於ケル軍拡ノ傾向ニ引摺ラルヽニ至ルノ虞ナキヲ保セザルヲ以テ我方ニシテ英米ニ対シ均勢ヲ要求スル半面法外ナル軍拡ヲ好マズトセバ此際須ク軍縮ノ大義ヲ高調シテ苟モ軍拡ト看做シ得ル協定ニハ加入ノ意思ナキ旨ヲ明確ニシ今ヨリ我ガ國防ト財政トヲ擁護スルノ措置ヲ執ルノ要アリト認メラル

㈢空軍協定ニ付テハ既ニ独ヨリ具体的提案アリ「ロカルノ」協定關係國タル英、佛、独、伊、白ノ間ニ話合ヒ始メラルベキ段取リトナレルガ英ハ空軍協定ヲ以テ唯々人心ヲ安ンズルニ足ル效果アリトナシ之ニ依リ必ズシモ國防ノ安全ヲ確保シ得ルモノトハ信ゼズ六月十日「ドラモンド」ハ空軍協定ニ關スル技術的困難ヲ述ベ例ヘバ第一線ニ立ツ軍用機ノ数ヲ一定セントスルモ第一線トハ果シテ如何ナルモノナリヤ軍用機トハ何ゾヤ其ノ他爆撃機トハ如何等ノ問題アリ又空爆ノ適法又ハ不法ニ付テモ実際上有效ナル標準及監督ノ方法ヲ設クルコト能ハザレバ適用上困難ヲ生ズト言ヘルコトアリ又「スヴィッチ」ハ七月一日佛ハ必ズシモ独トノ空軍均等ニ滿足セザルベシト告ゲ協定ノ成立ニハ幾多ノ暗礁アルヲ仄カス

然レドモ西欧空軍協定ノ締結ハ主トシテ英ノ欲スル所ニシテ英國政府トシテハ國論ニ対スル手前他ノ規約成立後迄之ヲ待チ得ザル立場ニ在ルモ安全保障強化ニ対スル佛伊ノ希望モ參酌シテ中欧及東欧規約ノ成立ニ助力スヘキヲ約シ先ツ「メーメル」問題ニ関シ独ト「リテュアニア」トノ紛爭解決ヲ圖リ此等ノ點ニ付テハ「イーデン」ノ「ラヴァル」「ムッソリーニ」訪問ニ依リ一應ノ諒解成レリト聞キ及ブモ前者ト後者ト何レヲ先ニスベキカノ點ニ付テハ何等約束ナキモノヽ如シ

尚六月二十八日「ドラモンド」ハ空軍ノ制限ハ「ロカルノ」ノ五國間ニ限リ蘇波ニ及バズト附言セリ

㈣陸軍々縮ニ付六月二十八日「ドラモンド」ハ独ハ師團数三十六ハ固執スベキモ兵数ニ付テハ必ズシモ然ラザルベシト語リタルガ七月一日「スヴィッチ」ハ佛ノ態度極メテ強硬ナレバ協定成立ノ見込ナシト嘆息シ尤モ独トシテモ

五十五萬ハ毎年徴募シ得ル壯丁数ヨリ計算スルモ無理ナレバ相当数ノ縮減ハ容認スヘキモ到底佛ヲ滿足セシムルニ足ル讓歩ヲ爲スコト能ハズト言ヘリ

三、「エティオピア」問題

㈠伊「エ」ノ紛爭ハ目下雨期ナレバ戰爭ハ九月下旬ナラザレバ開始シ得ズ從テ双方トモ準備ヲ急ギ待期ノ姿勢ニアルガ伊ハ滿洲ニ於ケル我ガ軍事行動ガ案外容易ニ成果ヲ收メタルヲ見テ簡單ニ目的ヲ達シ得ヘシト爲シ稍々軽々ニ事ヲ始メタル形ナルモ（「ローマ」外交界ニテ斯ク評スルモノアリ）其ノ後軍事上外交上種々ノ障礙ニ遇ヒ且酷暑ト悪疫トヲ敵トシ殊ニ慓敢（悍カ）ナル蠻人相手ノ小競合戰ナレバ人気一向ニ引立タズ出征兵士特ニ「ファシスト」義勇兵中ニ逃亡スル者多ク現ニ「ナポリ」ノ監獄ハ脱走兵ニテ充滿シ戰地ヨリ後送セラル、病兵ノ数モ益々多キヲ加ヘントスル実情ナレバ流石ノ「ム」首相モ前途ヲ憂慮シ如何ナル形式ヲ以テスルモ「エ」併呑ノ目的ヲサヘ達シ得レバ戰爭ハ成ルベク回避シタキ模様ナルモ「エ」軍ハ四十年前ノ戰勝以來伊軍ヲ軽視スレバ之ニ一撃ヲ加ヘザル限リ伊ノ希望スルガ如キ解決ヲ望ムベカラズ從テ現狀ニ於テハ「ム」首相ノ方寧ロ妥協的ニテ外面ハ國軍ノ士気ヲ沮喪セシメザランガ爲激勵叱咤スルモ内面ハ必ズシモ强硬論一點張リニテ盲進セントスルニハ非ズ機ヲ見テ手際ヨク切上ゲントスル底意ナルガ如ク之ニ反シ「エ」側ハ相当頑强ニテ外ニ対シテハ頻リニ平和的解決ヲ求ムルモ内心一戰敢テ辞セズトノ牢乎タル決意ヲ有シ國辱的讓歩ノ如キ夢想ダモ爲シ得ザル模様ナレバ仲裁者ニトリ困難ハ寧ロ「エ」側ニ在リト察セラル

㈡伊「エ」紛爭ノ解決案トシテ傳ヘラル、モノニ付

㈠「エ」ヲ伊ノ保護國又ハ委任統治地域ト爲スノ案ハ英同意セズ（一九〇六年ノ英佛伊條約ヲ改正シ英佛ノ權益ヲ尊重シナガラ聯盟監督ノ下ニ「エ」ヲ伊ノ委任統治地域ト爲サントノ考案ハ先年委任統治地域ノ独立ヲ認メ聯盟國ト爲シタル「イラック」ノ先例トハ正反対ニ聯盟國タル独立國ヲ先ヅ聯盟ヨリ除名シ而シテ之ヲ委任統治地域ト爲サントスルモノナレバ條理徹底セズ）

㈡伊領「エリトレア」ノ Massaouah ヨリ「アディス、アベバ」ノ北方ヲ過ギ伊領「ソマリ」ノ Mogadisque ニ達スル鉄道敷設權及鉄道ノ両側五十「キロ」ノ地帶ノ警察權ヲ伊ニ附與シ（伊ハ「エ」ノ独立尊重ヲ規定シ乍ラモ然モ

「エ」ニ於ケル佛、英、伊三國ノ勢力範圍ヲ定メタル一九〇六年ノ條約竝ニ一九二五年ノ「チェンバーレン」「ムッソリーニ」約定ニハ右鉄道建設ヲ豫見スト称ス）又伊領「ソマリ」境ニアル Ogaden 地方ヲ伊ノ勢力範圍ニ入レ（目的ハ主トシテ井水ノ利用）且「エティオピア」北部ニ於ケル棉花栽培及鉱山開掘ノ權ヲ伊ニ與ヘントスル考案ニ対シ（一九二五年ノ英伊約定ニハ両國ガ「エ」ニ於テ相互ニ相手國ノ利益ヲ支持スベキヲ定ム）「エ」ト英領「ソマリ」ノ Zeila 港（「ヂブチ」ト「ベルベラ」間、「ヂブチ」ヨリ四十五キロ東南ニ在リ）トノ間ニ鉄道ヲ敷設シ以テ「エ」ニ海港ヲ與フル爲必要ナル細長キ地帶ヲ英ヨリ「エ」ニ讓渡セントノ試案ハ（英ハ之ヲ以テ「エ」ニ利益ヲ提供スル所以ナリト爲スモ佛伊ニノミ鉄道敷設權ヲ與ヘザラントスル魂膽ナルハ明ニテ其ノ結果「ゼイラ」港ト「ヂブチ」港トノ間ニ競爭起キ現ニ経営難ニ苦シメル「ヂブチ、アディスアベバ」鉄道ハ益々苦境ニ陥リ且新海港ハ「エ」ヘノ武器密輸ヲ容易ナラシムヘシトテ佛モ伊モ之ヲ悦バズ）伊承諾セズ斯クシテ「イーデン」「ムッソリーニ」ノ交渉ハ不調ニ終レリ

尚佛國側ニテハ一九〇六年ノ英、佛、伊條約第九條ニ英、伊ハ「ヂブチ」「アディスアベバ」間ノ鉄道ノ競爭線トナルベキ新線路ヲ建設セザルベキ旨規定シアルヲ指摘シ英ノ提案ヲ非難スルモ右規定ガ伊領「ソマリ」及「エリトレア」間ノ鉄道ニ適用アリヤ又右條約カ「エ」ヲ委任統治地域ト爲ス場合ニモ效力ヲ存続スルモノナリヤ否ヤハ問題ナリ

六月二十八日「ドラモンド」曰ク「ムッソリニ」ハ唯一気ニ「エティオピア」ヲ呑マントス委任統治カ保護國カ將又伊人顧問ヲ無数ニ入レテ「エ」ヲ「アルバニア」ト同然ト爲スカ何レニスルモ其ノ面目ニカケテモ初志ヲ貫徹セントス「ム」ガ大童ニナリテ頑張ルハ「エ」遠征ニ対スル怨嗟ノ聲國内ニ滿チ一歩ヲ誤レバ「ファシスト」政府ノ基礎ニ動搖ヲ來ス虞アルガ爲ナリ英國政府ガ試ニ提示シタル経済的讓歩ノ程度ニテ今日時局ヲ拾收シ得ザルベキハ自分ノ夙ニ豫見シタル所ナリ五月下旬「ロンドン」ニテ二回閣議ニ出席シ「ム」ノ態度ニ付委曲説明シタルモ不幸ニシテ閣議ノ了解ヲ得ル能ハズ夫レカ爲今回「イーデン」ガ認識不足ノ解決案ヲ提示シ拒絶セラレタルヲ遺憾トスルモ同時ニ曩ニ報告シタル所ヲ裏書シタルニ滿足ス云々

㈢伊ハ八月二十五日ノ理事會出席ヲ必ズシモ拒絶セザル模様ナルガ伊ニ対シ聯盟ガ悪用セラル、カ又ハ伊ガ野蠻國タル「エ」ト同格ニ取扱ハル、コトアランカ直チニ脱退スト稱シ又伊ハ規約ノ全部ヲ此ノ事件ニ適用スベキヲ主張シ先ツ第十六條第四項ニ依リ半開國タル「エ」ヲ除名シ第十九條及第二十二條ニ依リ之ニ委任統治制ヲ実施セントスル腹案ナルカニ傳ヘラル

「ローマ」外交界ニテハ伊ハ聯盟脱退ヲ口ニスルモ其ノ眞意ハ寧ロ留マリテ能フ限リ之ヲ利用セントスルニアリ海軍協定以來独ガ孤立ヲ脱シテ英ニ近付カントスルノ風アリ伊ノ脱退後萬一独カ復歸セバ佛ハ蘇及小協商國ノ支援アルモ聯盟ニテ英独ニ対抗シ得ザルベキヲ以テ伊ノ反省ヲ促スナルベク伊モ亦徒ラニ脱退シテ國際協力ノ埒外ニ孤立スルヨリモ佛ト結ビテ聯盟内ニ勢力ヲ張ル方有利ナルベク況ヤ英ト雖モ強チ伊ヲ敵トスルモノニアラザレバ彼此比較考量シ伊ハ容易ニ脱退セザルモノナリト觀測ス

「ドラモンド」曰ク伊ハ聯盟ヨリ「エ」ヲ除名セントスルモ一九一九年「エ」ヲ聯盟ニ加入セシメントノ議起リタル時之ニ反対シタルハ英ナリキ其ノ後一九二三年「エ」ガ聯盟加入ヲ許サレタルトキ英ハ再ビ反対シタルモ Henri de Jouvenel 及 Bonin-Longare ガ頻ニ佛伊ノ爲辯ジタルカ爲英ハ「サン、ゼルマン」條約ノ武器輸入禁止條項ノ適用ヲ條件トシテ遂ニ承諾ヲ與ヘタルガ今ヤ却テ英ガ聯盟國タル「エ」ヲ支持シ佛ハ知ラヌ振シ伊ハ之ヲ除名セント意気捲クノ奇觀ヲ呈ス云々

㈣「エ」問題ヨリ欧洲ノ國際關係ヲ一瞥スルニ伊ハ英ガ「エ」問題ニ難癖ヲ付ケ且独ガ Anschlus (Anschluß ?) ヲ棄テザルヲ知リナガラ兎角中欧問題ノ解決ニ冷淡ナルヲ憤リ敢然トシテ排英的態度ヲ執ル空軍ノ發達ニ依リ「ジブラルタル」及「マルタ」ノ軍事的價値減少シ地中海ニ於ケル英海軍ノ威力モ亦昔日ノ如ク優勢ナラザル爲伊ハ必ズシモ英ヲ恐レズトサヘ噂セラル之ニ対シ英ノ國論ハ先天的ニ植民地問題ヲ重要視スルニ加ヘ「ナイル」河ノ上流ニ他國ガ勢力範圍ヲ樹立スルヲ袖手傍觀スル能ハズ又汎世界政策ノ見地ヨリ聯盟第一主義ヲ採リ殊ニ現政府ハ次期ノ總選擧ニ平和政策ヲ旗幟トシテ望マントスル關係モアリ旁々「エ」問題ニ付執拗ニ開戰阻止ノ方法ヲ講セントシ佛カ欧洲問題ニ付テハ聯盟中心主義ヲ高調スルニ拘ラズ「エ」問題ニ対シテハ寧ロ伊ノ軍事行

動ヲ默認スルカノ傾アルヲ不快トナスモ（伊ガ「エ」問題ニ深入リスレバスル程中欧問題等ニ付佛ニ依賴セザルヲ得ザル立場トナレバ佛ハ敢テ伊ノ対「エ」軍事政策ヲ責メズ）協調ノミ克ク平和建設ノ目的ヲ達スル所以ト認メ伊佛ヲ宥メテ実際上可能ノ範圍内ニ於ケル提携ヲ持續セントス

尚七月一日「スヴィッチ」及「アロイジ」男ノ語気ヨリ察スルニ佛モ伊モ此際断然英ト絶タントノ決意ハナキモ英独海軍協定及「エ」問題ニ対スル英ノ仕打餘リニ專断ニ過グレバ將來ノ爲ニモ今回ハ相携ヘテ相当强硬ナル態度ヲ執ルコト、爲シタルモノ、如ク殊ニ佛ハ英佛伊間ノ協調方法ニ付明確ナル手續ヲ定メンコトヲ力説ス

次ニ墺國問題ニ付伊ハ徒ニ洪ヤ小協商國ト小面倒ナル交渉ヲ續クルヨリモ寧ロ独ト腹ヲ割ツテ話合フ方眞ノ解決ニ達スル所以ト信ジ軍縮問題ニ対スル独ノ主張ニ対シテハ寧ロ理解アル態度ヲ執リ之ト接近セントスルノ傾サヘアリ

伊ノ対外的態度ガ常ニ「マキアヴェリスト」的ナルハ貧弱ナル國力及國際政局上ニ於ケル伊ノ地位之ヲ然ラシムルモノナルガ目前ノ利害ニ依リ容易ニ動カサレ刹那刹那ノ必要ニ應ジ反射的ニ動カントスル國民性モ亦其ノ一因タリ「エ」問題ニ付先ヅ日本ヲ攻擊シ轉ジテ独ヲ責メ再轉シテ英ヲ難詰シ中欧問題ニ付テハ或ハ佛ヲ利用セントシ事少シク面倒トナレバ独ヤ英ニモ亘リヲ付ケントスルガ如キ其ノ適例ナリ独裁政治家ノ爲ス所大戰十年前英、佛、伊、露ニ対シ「カイゼル」ガ頻リニ術策ヲ施シタルニ髣髴タリ之ガ爲伊ガ信ヲ中外ニ失セシコト夥シ

独ハ佛蘇トハ到底調和シ難キ関係ニ立ツヲ思ヒ寧ロ英ニ近付キ又小國ノ參加スル聯盟其ノ他ノ諸會議ハ大國タル自國ノ地位ヲ墜スモノト認メ能フ限リ大國相手ノ外交ニ精進ス

㈤「フィンランド」公使ガ「ムッソリーニ」此頃ノ遣リ口ヲ憂慮スル「ファシスト」幹部ノ談ナリトテ七月一日本使ニ告グル所ニ曰ク「独裁政治十三年「ム」ハ内政上ノ諸施設着々完成ノ域ニ達シタルモ経済上ノ窮迫ニ依ル民生ノ苦痛ヲ救フベキ途ヲ内ニ求ムルコト能ハザレバ対外發展ニ依リ國本ヲ培ントスルモ平和的手段ノミニテハ意ノ如クナラズ茲ニ於テカ多年國民ニ皷吹シタル「ローマ」帝國ノ偉業ニ倣ヒ少クトモ「モロッコ」ニ於ケル Lyautey 元帥ノ鴻業ニ匹敵スル事業ヲ成就セント欲シ事ヲ東阿ニ構ヘ一擧ニ植民地獲得ノ宿望ヲ達セントシタルモ内外ニ困難叢起シ現ニ

進退両難ノ苦境ニ在リ」ト

六月二十五日「ポーランド」大使曰ク過日「ナポリ」ニテ遠征軍出發ノ模様ヲ見タルガ植民地戰爭ニ対スル準備間ニ合ハザル爲服裝ノ如キモ中欧ニ於ケル戰爭ヲ豫想シテ用意セラレタル冬服ノ儘ナレバ南欧ノ暑気ニサヘ兵士ハ昏倒シ一向ニ元気ナク彼等ガ「アフリカ」ノ苦熱ヲ思ヒ脱走スル者多キニ至レルハ怪シムニ足ラズ

然レドモ「エ」ノ鼻息荒ケレバ假ニ英佛ノ助言ニ依リ略々其ノ目標トスル權益ヲ獲得シ得タレバトテ「エ」ハ長ク伊ヲ讎トシ不絶伊ニ反抗シ伊ハ之ガ鎭圧ニ忙殺サレ結局奔命ニ疲ルルコトトナラン英ハ伊ノ対「エ」政策ノ前途ニ幾多ノ困難アルヲ豫見スレバ退イテ不干渉ノ態度ヲ執ルヲ賢ナリトスルモ当面ノ問題ハ聯盟國間ニ公然戰爭ノ危険ガ実在シ規約ノ運用ガ麻痺セラレントスルヲ防止スルニ在リ然シテ伊ノ脱退ニ依リ聯盟ヲ崩壞ニ導クガ如キコトナカラシメツヽ然モ平和的解決ヲ計ラントスルモノナレバ所期ノ目的ヲ達スルコト難シ云々

「ユーゴー、スラヴィア」公使曰ク（六月二十二日）「エ」軍ニハ現ニ三十萬ノ正規兵アリ「エ」ノ將士ハ伊軍ヲ侮リ（同公使ハ常ニ口癖ノ如ク伊兵ノ弱キヲ說ク）且戰爭トハ即チ敵ノ小銃又ハ軍刀ヲ奪ヒ所有武器ノ多寡ニ依リ定マル其ノ社會的地位ヲ高ムルモノト解シ野獸ノ如ク山河ヲ駆ケ廻リ特ニ夜襲ニ長ズレバ愈々開戰ノ曉熱地到着後數ケ月間雨期ト悪疫トニ惱マサレ体力衰ヘ士気沮喪セル伊軍ヲ苦シムルハ必然ナリ今ヤ日、独、致ヨリスル武器ノ密輸入ハナキモ白、蘭ハ猶既約品丈ハ賣込マントシ從テ「エ」軍ノ彈藥意外ニ潤澤ナリ

伊ノ常套手段ハ虚喝ニ在リ「ローマ」ト同シク伊ハ政治工作ヲ以テ敵ヲ制シ戰ハズシテ勝ツノ術ニ長ズ故ニ「ム」モ此ノ邊ニテ案外屈伸性アル態度ヲ執ルヤモ計ラレズ然ラザレバ伊ハ遂ニ植民地戰爭ニ禍サレ疲弊ノ極「ポーランド」級ノ準大國ノ班ニ落チン云々

六月二十七日「タン」ノ「ロンドン」通信モ英國側ニテハ此ノ戰爭ハ必ラズ長引クベク欧ノ安全勢力タル伊ノ國際的地位ハ現ニ著シク低下シツヽアリ故ニ伊タルモノ伊ニ苦言ヲ呈スル者コソ其ノ友人タリ伊ヲ煽ツルモノハ実ハ其ノ敵ナルヲ覺ラサルベカラズト爲ス旨ヲ報ズ

四、安全保障

(一)墺國独立保障問題ハ「エ」問題ノ爲著シク重要性ヲ失ヒタルモ「ム」トシテハ対欧一般政策上未ダ遽カニ中欧規約締結ニ対スル熱意ヲ失ヒタルカニ見ラルヽヲ欲セズ唯々小協商國側ハ該規約ニ依リ相互援助ノ義務ヲ確立シ安全保障ヲ强化スルニアラザレバ墺、洪、勃側ト融和シ其ノ再軍備ヲ認ムルガ如キヲ肯ゼズ之ニ反シ独ハ相互援助ノ約定ヲ拒否シ且墺國内政不干渉ノ義務ハ各國ニ平等タルベシトナシ殊ニ一月七日ノ「ムッソリニ」「ラヴァル」協定中ニ墺ニ對シ禁止サルヽ宣傳ハ

Ayant pour objet de porter atteinte par la force à l'intégrité territoriale ou au régime politique トアルヲ指摘シ平和的ニ且適法的ニ行ハル、宣傳ハ差支ナシトノ解釈ヲ採リ毫モ Anschluß（Anschluß ヵ）ノ企圖ヲ棄テズ英ハ墺ノ独立擁護ノ爲ニハ軍隊ハ勿論武器彈藥サヘモ供給スル意志ナク佛ハ寧ロ小協商國主トシテ「チエック」ニ動カサレテ中欧規約ノ成立ニ力ムル実情ナレバ其ノ成否未ダ遽カニ豫測シ難シ

然レトモ「ム」ノ熱心ナル主張ニ動カサレテ(イ)佛ヨリ小協商國側ニ壓迫ヲ加ヘテ相互援助ニ関スル其ノ主張ヲ撤回セシメ（「スヴィッチ」内話）(ロ)英ヨリ独ヲ說キテ墺國不干渉ニ関スル何等カノ「フォルミュラ」ヲ承諾セシメ（「ドラモンド」内話）斯クシテ「ム」ノ顔ヲ立テントスルモ英ノ斡旋ニ対シ佛、伊ハ必ズシモ信ヲ置カズ（「スヴィッチ」内話）而シテ中欧規約締結ニ関スル「ローマ」會議ガ何時開カルベキヤ又空軍協定締結ニ先ンジテ開催セラルベキヤ否ヤ一切未定ナリ

(二)東欧規約ニ付テハ英ヨリ独ヲ說キ不侵略、侵略國不援助及二國間相互援助條約締結許容ノ基礎ニテ其ノ成立ヲ期セントスルモ（「ドラモンド」内話）「ソ」聯邦ト西欧各國トノ関係近時甚ダ面白カラザルモノアリテ即時成立困難ナル事情アリ

六月二十五日「ポーランド」大使曰ク蘇ト波トノ國交ハ目下小康ヲ保テルモ蘇ガ一方人種的ニハ汎「スラヴィスム」ヲ振翳シテ「チェコ」「ルーマニア」（近ク、佛致ノ如キ相互援助條約ヲ蘇ト締結セントス）「ユーゴースラヴィア」「ブルガリア」竝ニ「リテュアニア」及「バルテイック」諸國ヲ糾合シテ「ダニューブ」「バルカン」「バルテイック」方面ニ進出セントスルハ恐ルベク「ムッソリーニ」ノ如キ夙ニ此ノ危険ヲ看破シ之ニ備ヘザルベカラザルヲ說キ他方社

會的ニハ第三「インターナショナル」ガ近時第二「インターナショナル」ニ接近シ各國ニ於テ社會黨ハ共產黨ニ引摺ラレ始メ現ニ佛ノ共產黨ノ如キ佛蘇規約ノ締結以來大手ヲ振ツテ横行シ例ヘバ佛ノ戰爭荒廢地復興ニ從事シタル「ポーランド」勞働者ガ佛ニ止ランカ失業家トナリテ官民ヨリ邪魔者扱ヒニサレ歸國スルモ仕事ナケレバ路頭ニ迷フ窮境ニ在ルヲ見テ佛ノ共產黨ハ之ヲ煽動シテ在「パリ」「ポーランド」大使館及在「リル」同國領事館ニ殺倒セシメタルノ事實アリ警戒セザルベカラズ

蘇ノ当局及新聞ハ内部ノ分裂ヲ防ガンガ爲屢々外患ヲ叫ビ例ヘバ波ガ「メーメル」及「リテュアニア」ヲ奪ヒ「ダンチッヒ」ヲ独ニ與ヘントストカ（波ハ「リ」人ノ頑强ヲ知ルヲ以テ容易ニ手出シセズ）又ハ波ハ「ウクライナ」ヲ窺フトカ（波ハ「ウ」征服ニ対スル大ナル犧牲ヲ熟知ス「ピルスツキー」元帥ノ沒後波ニカヽル冒險ヲ爲ス餘裕ナシ況ヤ独トノ協力ノ如キ未ダ安ンジテ之ニ依賴シ得ザルモノアルヲヤ）言觸ラシ且騷ギ立ツルニハ閉口ナリ

蘇ハ敵トシテモ又味方トシテモ極メテ取扱ヒ難キ代物ナリ前記ノ宣傳ノ如キ実ハ蘇ガ熱望スル東欧規約ノ成立ヲ妨クル所以ニシテ東欧ニ於ケル安全保障ノ强化ハ汎「スラヴィズム」ノ抬頭ト蘇側ノ悪宣傳ニ禍ヒサル、コト多シ云々

㈢「ロカルノ」條約ハ英佛独ノ何レニトリテモ其ノ安全保障ニ関スル國際約定ノ中軸ヲ成スモノナルガ佛蘇規約ト「ロカルノ」條約トノ間ニ果シテ牴觸ナキヤノ問題ニ付「ドラモンド」ハ凡ソ政治條約ハ純然タル法律上ノ議論ノミヲ以テ論ズベキモノニ非ズ巧妙ナル法律論ヲ以テ牴觸ナシトノ解釈ヲ採リ得ザルニアラザルモ其ノ場合佛蘇規約ハ事実上死文ト化スト笑ヒ英ガ佛ノ解釈ヲ支持シテ両者間ノ無牴觸ヲ保障シタルハ偶々佛蘇規約ヲ生殺シニナセシモノナリトノ口吻ヲ漏セリ

独ガ蘇ノ領土ヲ侵略スルコト事実上アリ得ザレバ（両國間ニ陸境ナケレバ海軍又ハ空軍ヲ以テスル場合ノ外侵略ヲ想像シ得ズ）佛ガ蘇ヲ助クル爲独ヲ擊ツコトモ実際上起リ得ズ斯クシテ佛ヲ强要シテ折角相互援助ノ約定ヲ取付ケ得タル蘇ハ明文上ニハ東方ノ强敵日本ノ除外ヲ容認シ事実上ニハ主タル假想敵タル独ヲ逸シ唯々空誓文ヲ握ラセラル

㈣独ノ聯盟復帰ハ英ノ希望スル所ナルモ今回ノ「イーデン」ト「ラヴァル」及「ムッソリーニ」トノ會談ニ於テハ一切

話題ニ上ラズ而シテ今年ノ当初以來行ハレタル「ローマ」及「ロンドン」ノ會談竝ニ「ストレーザ」會議ハ「ム」ノ年來提唱スル四大國協調ノ精神ニ依ルモノト見做シ得ベク又東欧及中欧規約作成ノ會議ニハ自ラ小國ノ參加ヲ見ルベキモ其ノ多クハ大國ノ與國カ然ラザレバ其ノ鼻息ヲ覗ハザルヲ得ザル國々ナレバ実際上大國間ノ會議ト異ラズ

六月二十五日「ポーランド」大使曰ク聯盟ガ欧洲外ノ事件処理ニ適セザルノミナラズ空戰ノ發達セル今日開戰当初ノ急ニ應ジテ敏速ニ活動シ得ザルコト何人モ之ヲ疑ハザルヲ以テ（開戰二十四時間以内ニ勝敗ノ数ガ定マルヤモ計ラレザルニ理事會ノ召集ノミニテモ祐ニ其レ以上ノ時間ヲ要ス）欧洲諸國ガ豫メ聯盟ノ承認ヲ得テ相互間ニ安全保障又ハ相互援助ノ約定ヲ結ビ以テ國防ノ安固ヲ計ルハ実際ノ必要ニ照シ眞ニ已ムヲ得ザル所トナレリ

聯盟ノ職務ハ國際関係ノ悪化ヲ防ギ事件ノ激發ヲ未然ニ防止スルニアルモ之トテ聯盟理事會ガ現ニ日独ノ理事ヲ欠キ徒ラニ小國ノ理事ノミ多キ有様ニテハ覺束ナシ故ニ「ム」ノ唱ヘタル大國協調ノミ能ク聯盟ニ代リテ平和確保ノ使命ヲ遂行シ得ル譯ナルモ佛ガ小協商國ニ縋ラレ又自ラモ彼等ヲ利用シテ勢力ヲ張ラントスルガ爲兎角大國政治ニ反対スレバ結局安全保障ノ機関ナキコトトナリ英佛代表者ノ往復ニ依リ宛モ彼ノ掛橋ノ如ク辛フジテ大國相互間ニ聯繫ヲ取リ平和ヲ確保シ得ル次第ナリ

「ム」ハ四大國協調ニ波及蘇加入ヲ認ムルモ小國ノ團体ガ加入スルヲ排ス（小協商國ハ三國聯合スルモ独立ノ政策ヲ行フノ力ナキヲ自覺シ「ベネシュ」「チテュレスコ」ヲ仲介ニ佛ト結ビ其ノ國力以上ノ勢力ヲ欧洲ニ振ハントスルニ対シ「ム」ハ勿論波モ平常心悪ク思フ）大國協調ノ利便ハ小國ヲ交ヘザルガ爲徒ニ議論倒レトナラズ又一局部ノ小利害ニ囚レズ大局ヨリ打算シ得ルニ存ス独ガ軍拡ヲ断行シ伊ガ「エ」ニ出兵シ佛ガ蘇ト相互援助條約ヲ結ビ英ガ独ト海軍協定ヲ遂ゲタルガ如キ歐洲ノ形勢四分五裂ノ觀ヲ呈スルモ大國ノ間ニ腹藏ナキ話合ヒヲ進ムルトキ結局落付クベキ所ニ落付キ斯クシテ現時ノ如キ過渡期ニ必要ナル幾多ノ現狀打破ヲ最小限度ノ紛糾ヲ以テ行ヒ得ル利益アリ多クノ小國ヲ交ヘテ國際関係ノ大局的調節ヲ圖ルノ困難ナルハ聯盟ノ実驗ニ徵スルモ明ナラズヤ云々

五、英佛伊ノ協調

英ガ空軍協定ヲ佛ガ陸軍々縮ヲ、而シテ伊ガ中欧規約ヲ強調シ夫々自國ニトリ緊急ナル関係ニ立ツ問題ノ解決ヲ急ギ其ノ成立ヲ見ザル間ハ他ノ案件ノ決定ニ同意ヲ與ヘズト爲スニ於テハ三國間ノ結束ハ自ラ破レ結局独ヲシテ其ノ間隙ニ乘ゼシムルニ至ルベキハ見易キノ道理ナレバ英ハ「ストレーザ」ニテ確立シタル三國間ノ協調トハ共通ノ利益ヲ擁護スルヲ根本ノ精神トシ之ガ遂行ニハ一一ノ必要ニ應ジテ機宜ノ便法ヲ講ズルヲ妨ゲズトノ了解ノ下ニ実際上可能ノ範圍内ニテ佛伊ト協調セントスルモ英独協定ニ際シ英ガ敢テシタル拔驅ケニ対スル佛伊ノ反感及將來ニ対スル不安ハ未ダ容易ニ去ラズ「イーデン」ハ此ノ點ニ付或程度迄「ラヴァル」及「ムッソリニ」ノ諒解ヲ取付ケ得タリト爲シ「ラ」モ「ム」モ過去ノ行懸リハ暫ラク水ニ流シ將來ノ協調ヲ計ラントスト内話シタルモ「ラ」「ム」ノ側ニテハ必ズシモ斯ク簡單ニ諒解ヲ與ヘタル次第ニハアラズ（「スヴィッチ」内話）況ンヤ「イ」カ豫メ「ラ」ニ相談セスシテ佛ニ利害関係アル「ゼイラ」割讓ノ試案ヲ「ム」ニ提示シタルヨリ英ニ対スル佛ノ疑惑ハ再ヒ加ハリ英佛伊間協調ノ將來ハ甚シク憂慮サル、モ結局ハ英ノ說クガ如ク解決ノ機運熟シタル案件ヨリ手ヲ着ケ一歩一歩全部ノ解決ニ向ツテ進ムノ外ニ途ナク唯々佛伊トシテハ此ノ際英ガ其ノ欲スル空軍協定ノミヲ取上ケ之ガ締結ヲ急カントスルニ対シテハ飽ク迄反対ノ態度ヲ執ルベキモノト觀測セラル

英佛独蘇ヘ轉送セリ

68 昭和10年7月14日　在ポーランド伊藤公使より広田外務大臣宛

ベルリンから帰還したポーランド外相より独国の外交政策およびソ連と小協商諸国間の諸動向等につき聴取について

機密公第一三二號　（8月12日接受）

昭和十年七月十四日

在波蘭　特命全権公使　伊藤　述史〔印〕

外務大臣　廣田　弘毅殿

（本信写送付先　獨、佛、致、羅〔）欠カ〕

「ベック」外相伯林訪問ニ関スル件

（其ノ三「ベック」外相ノ談）

本月十二日「ベック」外相ト會見同外相ノ伯林訪問ヲ中心トシ歐洲政局ノ一般ニ関シ意見ノ交換ヲ爲シタルカ其ノ要領左ノ通リ

一、「ベ」外相ハ獨逸政府ノ待遇ニ関シテハ其ノ間款待至レリ盡セリニテ夫レ以上ヲ望ムコト能ハサル有様ナルノミナラス其ノ雰圍氣モ極メテ親密ニシテ満足至極ナリシ旨ヲ述ヘ波獨関係ニ関シ昨年一月ノ共同宣言以來ノ両國政策ヲ継續スヘキ点ニ関シテハ意見ノ一致存スルノミナラス五月ノ「ヒットラー」外交演說中波蘭ニ関スル部分（報告済）ハ當時波蘭政府トシテハ承認セルノミナラス贊意ヲ表シタルカ今回更ニ會見ノ上親シク此ノ点ヲ確保スルコトヲ得タル次第ナリ從テ波獨間ノ関係ハ現行ノ政策ニ何等變更ヲ加ヘサルコトヲ明カニシ此ノ点ハ「コムミュニケ」ニテモ發表シ置ケリト述ヘタリ

二、本使ヨリ致蘇條約並ニ「ベネッシュ」カ莫斯科ニ於テ恰モ小協商諸國ノ代表者ノ如ク行動セル結果本年一月羅馬ニ於テ目論マレタル「ダニューブ」協約ニ関シ政治的見地ヨリ見テ多少ノ變化ヲ來ス様思ハル從テ右ハ波獨両國ニモ影響スル所アルヘキモ此ノ点ニ関シ伯林ニテハ関心ヲ示サザリシヤト尋ネタルニ「ベ」外相ハ「ベネッシュ」ハ元來必ス外國トノ提携ヲ策スル人物ニシテ曩ニ佛トノ條約ヲ締結シタルカ近來佛國カ國内問題ニ捉ハレ居ルヲ以テ或ハ佛ノミニテハ（脫?）セスト考ヘ蘇ト提携スルノ決意ヲ爲シタルモノニ非スヤト観察セラル殊ニ「ベネッシュ」カ恰モ小協商諸國ノ代表者ノ如キ態度ニテ行動セル由ナルモ爾後ノ形勢ハ「ベネッシュ」ノ豫想ニ反スル如キ發展アリタルモノト察セラル卽チ蘇「羅」間相互援助條約締結問題ノ如キ貴使ノ述ヘラレタル通リ「チチユレスコ」外相ハ或ハ贊成ナランモ宮中軍部ハ頗ル躊躇シ居リ未タ交渉開始ノ運ヒニモ至ラサルノミナラス「ユーゴー」國ニ於テハ「ストヤジノウイチ」内閣成立セルモ新首相ハ「イエウチッチ」前首相ト異リ從來巴里「プラーグ」ニ頼ル政策ニ慊ラサリシ人物ニシテ寧ロ親英派ト称セラルル程ニシテ「ユ」國ノ蘇聯邦承認ハ前内閣ヨリ更ニ影薄クナリタル様思ハル斯ノ如キ狀態ニ付「ダニューブ」協約モ遲々トシテ進行セストテ伯林ノ態度ニハ言及セス専ラ私見ヲ述ヘタリ

三、本使ヨリ英獨海軍協定ニ関シテハ波羅的沿岸諸國殊ニ瑞典ハ相當神經過敏トナリ居ルモ此ノ点ニ関シ波獨両國間ニ

ハ何等カ話合アリタリヤト尋ネタル處「ベ」外相ハ獨逸ハ相當ノ海軍力ヲ保有シ度キ希望アルコトハ承知シ居タルモ是亦已ムヲ得サル所ニシテ其ノ結果波羅的沿岸諸國ヲシテ神経過敏ナラシムルコトハ當然ノ歸着ナリ貴使ハ獨逸ノ海軍ガ波羅的海ヲ主トスル様言ハルルモ艦隊ハ移動スルコト容易ニシテ「キール」港モ斯ル場合ニ備フル爲建設セラレタルモノナレハ獨逸海軍力ノ増加ハ波羅的沿岸諸國ノミニ限リ影響アリト見ルコト如何カト存セラルト述ヘ英獨海軍協定ニ関シ特ニ波蘭カ関心ヲ有スル如キ態度ヲ示サス

四 本使ヨリ「ベック」外相ノ伯林滯在中ノ感想トシテ伯林政府ハ從來ノ如キ各國政府ト協調ヲ拒ムノ態度ヲ変更スルノ徴候ヲ認メラレ又ハ印象ヲ受ケラレタリヤト尋ネタルニ對シ同外相ハ何等斯ル前兆乃至ハ印象ヲ感得セス

獨逸政府ハ從來ノ態度ヲ継續シ貴使ノ言ノ如ク孤立外交ヲ續行スルモノト想像セラル只「ロカルノ」ノ如キ西歐ニ関スル空軍協約締結ニハ反對セサルヘシ又伯林滯在中獨逸政府ハ佛國ニ對シ何等「アニモジデ」ヲ有セサルコトヲ認メタルト同時ニ佛蘇相互援助條約ニ関シ鮮カラス憤慨シテ居ルヲ観取セリ佛國ハ蘇トノ條約締結ニ依リ獨佛関係ヲ何等カ展開シ得ルモノト思考シタル次第ナルモ此ノ点ニ関シ其ノ誤ナルコトヲ述ヘタルコトアルモ今回其ノ正當ナリシコトヲ伯林ニ於テ實験セリト述ヘタリ

五 本使ヨリ「ベネッシュ」ノ莫斯科訪問ニ依リ豫見セラレタル如ク羅蘇交渉モ進マス羅國ノ蘇聯邦承認モ遲延スルコトトモナラハ蘇政府ハ再ヒ神経ヲ悩マスコトナラント述ヘタルニ「ベック」外相ハ昨年半頃ヨリノ「リトヴィノフ」ノ政策ハ実際上何等成功シタルコト無ク今回モ蘇ハ當然神経過敏トナリ彼是宣傳スルナランモ實ハ右ハ蘇政府ノ心理狀態ニモ依ルモノニシテ彼等ハ蘇ノ味方ナルコトヲ宣言セサルモノヲ敵ト見ル癖アリ自分ト「リ」トノ論争ハ常ニ此ノ点ニ関聯シ居リ自分ハ「リ」ニ對シ蘇ノ味方ニテモ無ク獨逸ノ味方ニテモ無シ唯々波蘭ノ味方ナリト答ヘ居ル由ナルモ此ノ点ニ関シ了解ヲ得ルコト困難ナリト述ヘタリ云々

69 昭和10年11月9日 在ポーランド伊藤公使より広田外務大臣宛(電報)

ベルリンにて在独国仏国大使と会見し欧州情勢につき意見交換について

別電 十一月九日発在ポーランド伊藤公使より広田外務大臣宛第三三号

右会見において独仏関係が良好化しつつあるとの同大使の観測表明について

ワルシャワ　11月9日後発
本　　　省　11月10日前着

第三二號

「ラヴアール」佛外相ハ蘇トノ同盟ニ關シ多少懸念スル所アリ此ノ際獨逸トノ了解ヲ計ラントシ伯林ニ密使ヲ派シ獨逸ハ「ゲーリング」ノ「ザール」ニ於ケル演説ヲ以テ右ニ對シ答ヘタリトカ英國ハ伊「エ」紛争問題ヲ契機トシ聯盟ヲ改造シ獨ノ歸來ヲ容易ナラシメ英、佛、獨間ニ今日以上ノ協力關係ヲ齎シ以テ歐洲平和ノ維持ヲ計畫シ居レリトカノ風説先月三十一日ヨリノ壽府會合ヲ機トシ各地ニ傳ヘラレ英外相カ之ヲ打消スニ至レルコトハ御承知ノ通ナルモ歐洲各國ノ新聞ハ相變ラス獨ヲ中心トシ英、佛ノ行動乃至意嚮ニ關シ論議シ其ノ眞相頗ル不明ナルニ付本使ハ壽府ヨリ歸任ノ途次伯林ニ立寄リ十數年來ノ知已(己カ)ナル佛國大使ト去ル八日右ニ關シ意見交換ヲ爲シタルカ同大使ノ談話中參考トナルヘキ點大要別電ス

壽府へ暗送セリ

(別　電)

ワルシャワ　11月9日後発
本　　　省　11月10日後着

第三三號（極秘）

(一)[1]「ラヴアール」ノ意見ニ依レハ佛國ハ現在何等他國ニ要求スル所ナキ狀態ナルニ付各國ト平和關係樹立ヲ希望シ居ルモ佛國民ノ心理ヨリ先ツ英、伊小協商巴爾幹諸國トノ間ニ了解ヲ遂ケタル後ニアラサレハ獨逸トノ話合ハ適當ナラスト考ヘ居ル處現在ハ右各國トノ了解略成立セルヲ以テ（蘇トノ條約締結モ此ノ意味ニシテ「ラヴアール」ハ決シテ蘇ノ手先トナルコトヲ欲スルモノニアラス）獨逸トノ話合ヲ爲スモ差支ナシト思考シ居レルモ未タ獨逸トハ何等具体的交渉ニハ入リ居ラサル狀態ナリ

(二)獨逸ハ目下非常ナル經濟危機ニ頻シ居リ之ヲ切拔ケサレハ政府ノ運命ニモ係ハル次第ニシテ其ノ爲ニハ英米ニ依賴スル外ナシト思考シ居ル「シヤハト」ハ獨ヲシテ英米

ニ接近セシムル爲折角努力ヲ爲シ居ルモ「ナチ」ノ急進分子ヲ納得セシムルコトハ容易ニアラサル様子ナリ而シテ獨逸ハ從來英佛ヲ分離シ得ルモノト確信シタルカ斯ル政策不可能ナルコト最近明瞭トナリ英國ト接近スル爲ニハ佛トモ了解ヲ遂クル外ナシトノ結論ニ達シタル模様ニシテ此ノ二、三週間來獨逸新聞カ從來ノ反佛論調ヲ掲ケサルニ至レルノミナラス獨逸政府モ佛ニ對シ多少トモ理解的態度ヲ示スニ至リタル所以ナリ

(三)[2]右ノ如ク獨逸ハ英國ニ依頼ノ必要アリ且ツ今回英國カ示シタル大ナル威力ニ對シ非常ニ感銘ヲ受ケタル一方英國モ亦成ルヘク速ニ獨逸ヲ歐洲ノ「コレクテイーブ、システム」ノ下ニ引入ルルコトヲ希望シ居ルコト明瞭ニシテ總選擧後ノ新内閣ハ此ノ意味ニ於テ對獨行動ニ出ツルコト豫想セラル右ノ目的ヲ以テ英政府ノ爲シ居ル置石ハ例ヘハ英外相ノ壽府ニ於テ爲シタル原料分配問題ニ關スル演說、英外相カ壽府ニ於テ「アブノール」事務總長ヲ午餐ニ招キ聯盟改造ヲ理論的ニ討議シタル如キ其ノ例ニシテ又獨逸カ之ニ對シ應答シツツアルハ最近ノ獨逸新聞ノ論調ニ依リ明瞭ナル所ナリ乍併英同僚ノ話ニ依レハ問題ハ現在其ノ程度ニ止マリ未タ具體的交渉ニ入リ居ラサル様子ナリ云々

壽府ヘ暗送セリ

~~~~~~~~~~~~

70　昭和10年12月2日　在ソ連邦太田(為吉)大使より広田外務大臣宛(電報)

英ソ接近を促す様々な運動が報じられるなか近くロンドンにおいて英ソ平和親善会議の大会開催との情報もあるので調査方要請

モスクワ　12月2日後発
本　　省　12月3日前着

第六〇五號

本使發英宛電報

第六號

貴地發「タス」通信所報ニ依レハ七日貴地ニ於テ蘇聯邦トノ平和親善會議開催セラレ勞働組合、購買組合等ノ代表者ノ外下院議員ヲ初メ多數ノ有力ナル英國政治家モ參加スヘシトノコトナルカ近來此ノ種英、蘇接近ノ促進ヲ計ル爲ノ運動アルヤノ報道屢當地新聞紙上ニ傳ヘラルル處右會議ノ重要性其ノ他參考トナルヘキ點御査報煩度シ

大臣ヘ轉電セリ

~~~~~~~~~~~~

71　昭和10年12月4日　在英国藤井(啓之助)臨時代理大使より広田外務大臣宛(電報)

英ソ平和親善会議の大会が開催される予定だが注目には値しない見込みであり対ソ借款の計画進行中との風説も実現は困難との観測について

ロンドン　12月4日後発
本　　省　12月5日前着

第三九四號

本官發露宛電報

第三號

貴電第六號ニ關シ

Congress of Peace and Friendship with U.S.S.R. ハ七日 Friends Meeting House ニ於テ行ハレ「アレン」卿(元I、L、P、「チエアマン」大戰中「コンセンサス、オブジエクター」トシテ三度投獄セラル)英露親善促進ノ決議案ヲ提出シ「マーレー」卿「パスフイールド」卿(「シドニー、ウエヴ」)等ノ演說アル由ニテ一部保守黨議員ノ參加モ噂セラレ居ルモ前記ノ顔觸ニ徵シ主トシテ蘇聯ニ好意ヲ有スル共産系乃至勞働黨系分子ノ「マニフエステーション」ト認メラルル處當地ニ於テハ「ガーデイアン」、「ヘラルド」等カ小サク報道シ居レルノミニテ特ニ注意ヲ惹キ居ラス

尙最近千萬磅乃至千六百萬磅對露借款說傳ハリタルカ對露輸出不振（本年一月乃至九月ニ於ケル露ヨリノ輸入千三百八十萬磅ニ對シ露ヘノ輸出二百七十萬磅ニ過キス）ノ打開策トシテ商務省方面ノ考量ニ上リタルコトアルハ事實ナル様ナルモ當地ニ於ケル起債ハ政府ノ保障アルニアラサレハ見込ナク公共事業、軍備充實等ノ爲資金ヲ要スル際政府ニ於テ保障ヲ與フルカ如キコトハ期待シ得サルヘキ一方舊露國債務問題モ解決シ居ラス又一部ニハ對露輸出促進ノ爲ニハ現英露通商協定ノ廢棄ヲ可トスト論スルモノスラアリ一般ニ本件借款ハ可能性ナキモノト觀測セラレ居レリ

大臣ヘ轉電セリ

~~~~~~~~~~~~
~~~~~~~~~~~~

72　昭和10年12月10日　在ポーランド伊藤公使より広田外務大臣宛（電報）

ソ連が対英接近を試みつつあるとの風説に対し我が方との情報交換を密にしたいとのポーランド外相の希望表明について

ワルシャワ　12月10日後発
本　省　12月11日後着

第三八號（極秘）

本使發英宛電報

第二號

永井大使へ

九日「ベック」外相ト會談ノ際同外相ハ最近各方面ヨリ英蘇接近ノ風説ヲ聞知セルカ右ハ蘇側ヨリ出テタルモノラシク英國ハ未タ斯ル方向ニ進ミ居ルトモ思考セラレサルモ蘇側ニ於テハ例ヘハ契約ノ期限前ニ金塊ヲ以テ支拂フ等「シテイー」側ノ好意ヲ取得スルニ努メ居ル事實モアリ英蘇接近ヲ希望シ居ルコト明瞭ニシテ英國トシテモ「エチオピア」問題等アリ他方面ニ於テ無事ヲ希望スルハ無理カラヌコトナルヲ以テ右ノ如キ風説モ一概ニ之ヲ葬リ去ル譯ニモ行カサルヘク萬一事實化セハ滿洲政局ニモ重大ナル關係アルヘシトテ本使ニ對シ何等情報ヲ有セラルルヤト尋ネ今後ニ於テモ情報ノ交換ヲ希望セリ

若シ右ニ關シ何等御聞込ノ次第モアラハ御電報願上度シ

大臣ヘ轉電セリ

73　昭和10年12月11日　在英国藤井臨時代理大使より広田外務大臣宛

英ソ平和親善会議の大会において対ソ関係改善が重視され具体策として対ソ投資の安全と必要が提唱されたとの英国紙報道振りについて

普通第五一九號　（接受日不明）

昭和十年十二月十一日

在英
臨時代理大使　藤井　啓之助［印］

外務大臣　廣田　弘毅殿

公信寫送付ノ件（英蘇接近ニ關スル件）

昭和十年十二月十日附本使發在蘇太田大使宛普通第二號公信寫何等御參考迄ニ送付ス

普通第二號

昭和十年十二月十日

在英
臨時代理大使　藤井　啓之助

在蘇
特命全權大使　太田　爲吉殿

英蘇接近ニ關スル件

過般所報ノ Congress of Peace and Friendship with Russia ハ七日 Friend House ニ於テ駐英蘇聯邦大使臨席ノ下ニ開カレタルガ之ニ關スル「タイムス」並ニ「ガーディアン」ノ報道要領左ノ如シ

同大會ハ英國民百萬余ヲ組合員トスル各種社（ママ）界文化宗教産業共同組合其他政治團體ノ代表八百餘名列席セルガ先ツ「リストウエル」卿ノ開會ノ辭ニ始マリ「アレン」卿「ブースビー」代議士（保守黨）「コックス」代議士（勞働黨）「パスフイールド」卿（シドニーウエッブ）「バーナードショウ」等相次イテ立チ相互的誤解ニ災セラレタル從來ノ英蘇關係ヲ違（遺カ）憾トシ蘇聯ハ其ノ聯盟加入以來英ト相並ヒ混頓タル世界ノ現狀ニ於テ最モ眞摯ナル平和熱望者トナリタルヲ以テ歐洲ノ平和維持ハ一ニ英蘇ノ親善關係ニ依存スト爲シ對蘇關係改善ノ方法トシテ對蘇投資ノ安全ト必要ヲ説ケリ尚最後ニ「アレン」卿ハ左記決議案ヲ提出全會一致ヲ以テ通過セシメタリ

本大會ハ

一、蘇聯邦ノ世界平和促進ニ對スル努力殊ニ聯盟規約保持ヲ多トス

二、英國政府ガ英蘇間ノ通商並ニ友好關係ヲ人類共同ノ利益ノ爲ニ促進スル爲努力ヲ惜シマサル樣切望ス

三、世界平和維持及ヒ人類ノ福祉ノ爲ニハ國際諸問題ニ於ケル英蘇ノ最モ緊密ナル提携ヲ必要トスト確信ス

四、同時ニ兩國民間ニ於ケル相互理解ヲ增大確乎タラシムル爲相互訪問其他アラユル方法ニヨリ友好的接觸ノ機ヲ擴大センコトヲ要望ス

尚同大會ハ八日（日曜）モ引續キ行ハレ列席者ハ「ケンブリッヂ」劇場ニテ蘇聯紹介ノ映畫ヲ見又チエリユースキン探険ニテ有名ナル「オツト、シユミツト」教授ノ北極探險ト蘇聯ト題スル講演ヲ聽キテ解散セリ同大會ニ對シテハ「ロイドジョージ」「バーミンガム」ノ僧正等援助ヲ與ヘ居

ル趣ナルモ主トシテ共同組合主義（コオペラティスト）（大會出席ノ三分ノ一ハ共同組合關係者）及平和主義者ノ主催ニ係リ混頓タル世界ノ現狀ニ鑑ミ折角本年三月「エデン」ノ「モスコー」訪問ニヨリ英蘇間ニ釀成セラレタル好感情ヲ維持助長セントスル目的ニ出テタルモノノ如キモ一般與論ハ之ニ對シ大シテ關心ヲ有セサル模樣ナリ

右何等御參考迄ニ申進ス

〜〜〜

批准促進方ヲ勸告セルカ右批准完了セハ蘇聯ハ東方ニ注意ハ傾ケ得ヘク好都合ナリ」ト吹聽シ居タル趣ニテ同公使ハ若シ右勸告カ事實ナリシトセハ北支方面ノ情勢等ニ付憂慮中ノ英ニ對シ蘇カ之ヲ示唆セルニ依ルカト思ハレ又之ヲ吹聽セルハ英ト斯ク迄ニ密接ニ聯絡アルヲ諸小國側ニ宣傳スル爲ナリシカト想像セラルト述ヘ蘇ノ動靜ニ付自分等ハ常ニ深キ關心ヲ有スル故ニ今後何等御聞込アラハ伺ヒ度シト依頼セリ

右蘇大使ノ言動ノ動機及其ノ内容ノ眞僞ニ付相當疑問ヲ存スルモ不取敢電報ス

佛、波ヘ轉電シ在歐洲各大使ヘ暗送セリ

2　安全保障問題をめぐるソ連の動向

77　昭和10年1月23日　在仏国佐藤大使より広田外務大臣宛(電報)

小協商諸国代表との晩餐の席において独国およびポーランド不参加でも東欧ロカルノ案は放棄しない旨仏国外相言明との諜報者よりの情報について

パリ　1月23日後発
本省　1月24日前着

第二九號

今回ノ理事會ヲ機會ニ「ラバール」外相及小協商國代表等トノ間ニ行ハレタル交渉ニ關シ諜報者内報左ノ通

理事會前小協商國ハ「ユーゴー」ノLoublianaニ於テ十一日會合一應羅馬佛伊協定ニ贊同シ各自ノ主張ハ墺太利協定交渉ノ際ニ讓ルコトヲ申合セタルカ今回ノ理事會ヲ機會ニ小協商國代表ハ巴爾幹協定國協定(代表?)及「リトビノフ」ト共ニ「ラ」外相カ佛伊協定ノ結果其ノ友邦ヲ忘レ一昨年ノ羅馬四國協定ノ轍ヲ踏ミ軍縮問題等ニテ意外ノ讓歩ヲナシ條約改訂論者ニ引摺ラルル無キヤヲ危フミ同外相ニ對シ頻リニ其ノ眞意ヲ追求シ「チチユレスコ」ノ如キ伊國ノ友邦ハ洪牙利ノミナルニ反シ佛國ノ友邦ハ數國アリテ較ヘモノニナラストテ愼重ナル態度ニ出ツヘキコトヲ說ク所アリシカ結局十八日ニ至リ「ラ」ハ前記諸國代表トノ晩餐ニ於テ假令獨波兩國カ參加セサルモ東歐「パクト」案ヲ放棄セス又軍縮ニ付テハ獨逸カ聯盟及軍縮會議ニ復歸シ東歐協定及墺太利協定ニ參加シ且佛國及伊國ノ兩國ニ對シ軍備上ノ優勢ヲ認ムルニ非サル限リ(此ノ最後ノ點ハ羅馬會議ノ結果ナリ)獨逸ノ再軍備ヲ認ムル能ハスト言及シ安心ヲ與ヘタル由ナリ

在歐洲各大使、智、波、羅、希、「ラトビヤ」、壽府ヘ暗送セリ

78　昭和10年3月28日　在英国松平大使より広田外務大臣宛(電報)

英国国璽尚書の訪ソは欧州の平和維持に関する協議のためであり東洋の問題を論ずる趣旨ではないとの英国大蔵次官の説明について